湖月抄

いすのは

Japan 9

夕顔 并二

源氏十六歳の夏より十月までの事見えたり。これも帚木の并也。以歌并詞為巻名也。詞にはかの白くさけるをなん夕顔と申侍るとあり。歌 心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花 よりてこそそれかとも見め たそかれにほの〴〵見つる花の夕顔とあり

六条わたりの御忍びありき 細 六条の御息所のこと也。帚木巻に書ざりし事をこの巻にあらはす也。めづらしからぬ事は書ざる也。御息所は前坊の北方なりしと也。前坊は保明親王諡号文献太子。延喜の御子也。早世也。此御息所は中務卿親王の女也。後に源氏通ひ給ふ。かくてかの御息所は斎宮の母也 花 六条わたりの御忍びありき 細 源氏の乳母 大弐のめのと 細 源氏の乳母惟光が母也。大弐の乳母の子に惟光あり 花 源氏の乳母八人ありといへり

六条わたりの御忍びありきのころ内裏よりまかで給ふ中やどりに大弐のめのといたくわづらひて尼になりにけるとぶらはんとて五条なる家たづねておはしたり。御車入るべき門はさしたりければ人して惟光めさせて待たせ給ひけるほどむつかしげなる大路のさまを見わたし給へるに此家のかたはらに檜垣といふものあたらしうして上は半蔀四五間ばかりあげわたしてすだれなどもいと白うすゞしげなるにをかしきひたいつきのすきかげあまた見えてのぞく立さまよふらん下つかたおもひやるに

めのと皇子の例によりてハ二人あるべき歟光のつらなりハ二人ならべし下の詞よそ〳〵しき人あまた
あるやうなりしかどの詞にて大弐のめのとはつぎにあたる惟光のめのとハ末摘花に侍従とあり
これみつ　惟光也大弐のめのとの子源氏の御めのと子ケライ也民部大輔とあり
むつましきかぎりの　細　さいやうすゝぬりしかり下京辺乃さ内なりけんかし
たてしとみ　細　下ハ七二板なくよこハ蔀のことくまなる所なるに車ふくる大臣
家どの車ハ八葉蔀とてまた家の牌ハ二人作りのやうなるにもとあり後拾遺雑一ハ月
あかくたり乃乗ていぞそゞきに女房の車にもぐる男まゐらんなどいひ入させたれどかへらねハ
かれそでもあまさる宿ともいひおさひて月をもみの人のいるべき
かくさ侍らん　孟　かくのよりおさり女をうけるさやうなるをもやりて一勘云とし
こくの上よりのぞく女の床あどめうまへをハさけさ乃給ハあふじ也といひやる也なり
やゝ　まかりて　いそぎ侍り　ぐらよしけうるれもわちらぞせもをるいきるものゐく
まんと思ひつゞけて侍るあん　つじん分あかんとやうかりて　細　とかへり　御車
わやしくゆかりあるここゝと　もいうりやはしきまへのいざさはもどもせ給ひ　細　思ひ給ひてすゝ給ふ
帚木ニいうらく　拔也
御車もいそしやゝしまつり　雅とりさへしんをうらとけあるくむらしけの
義　網代車也およれ思ひある　ぞさまへれバ八さへくのやうなる紙をして
きのひとする網代車ハ女をぞ　細　とりさへつへし
ものゝ相あれハ誰しもたちわぎしららいれの行すくりのもゝれさこすゆゐ
ぜじにて御車も紀之例　奥うらたらく
て御随身も人に対して紀
なさもあらさく　とま象ふくい川こゝらしてしもまたしなほは
うなもなさもてきんれ
警蹕也警蹕ハ往来の人を

しゝめいはもしむつかしられく思ひハすゝおさされど　もすぐ〳〵せあるくねく　孟　むつかしハ内くのおりさきゝや
前駆を追ありとさとく月のうあかり　雲代ののとされの有様まほりまらく入り河　ちか
これらさとくんと　是ハ思ひさふさに人のようじと車の有様からのさゝさますゝく　袖よ物見
の車なり
いづこうさして　細　其中ハいつくりさして　わざきらんゆまさゝまり　どぞ宿と定むらん
ぞの巻も　細　何せんにぞの　かの寄の宿乃やうなるもと住めハつくすまうれつる
とゝあどと八重葎とへらん宿　ぞのうてなもと思ひれどしかりさりたけど門内
まゐうりしてそねめ源氏ハい　夕かのうき　よいとおどやかなるつゞくのあゝらしげよそひ
つと宿の葎まほ茂りもゆく
もてうるさ住あとえく　うれあよまるさ紀ぞとのれひらりさとの
親しかる家ハ随身なり
師　源氏の君乃随身なり　ものほしうもどらるさ　泉の白きハ何の花なくしくとひ
随身也
さうりけ内む　枝とつて　ごらわまや　イ二十之
ねて嘔るゝよまさてうね袖之
大和物語ハうきのうるをとせをせ
て　あうさきそうひかのさくゝ
のよろさきよの　すなうし　侍
しまそや世の中ニあり
陰くいよ蛮ある人　えそ
よの机り花の眉ひとそう
細　とのまひまう　ミハ此小家
の垣ぐうつゞ此花のをひを
ごらま　じらうまへど出随身ついのちぞおきろくさける
花なん夕がほとやゆかゝ花の名ハひとめくさて
からおやあつるさうねのまなんされ給まりニやんの
ぞおいと小家がちよむ川しあなかるさそのの
これものとあやまうおハしらがひくむむく

てんちしげるかたく垂くのまほく八夕顔のつるとの蔓乃まほよ似たると云也
ともなき人よ　河　かくらもとくそれそのきことよこのくさけれ八何の花ぞとも
細　白くさけりこそ梅のむもとまりて候へり　續古今小侍従か哥に　さきにけりまた人へり
車めぐらぬ名を知らめし夕かほの花　家の心をえ見たる
随身　品八ちかるひ紅弥源のちまへ六位まてあるへし　箋　源氏當麦中おこへ小随身なるべきこと
人めきて　細　名斗八人とかしきといふゐといふまつりてといへるをや　怖茸紙なとも夕顔八おもしろき
よ似くたれともいまかりしりめべきもあり
あやしきかきね　孟　五位以上の人の家よ八あらち事え云々
このしぐあも　河　此西彼面也こちらこなたと
宝敷いつこうしも可着ことこ又子相遠いつくらく。花　梯の中ゐゆ此句ありと式アりぐふつりも
行くる山よるくるべかりしんとみへるまや
けめくしかうしね　細　花名の様く。河海なんと云くいふ八まほしろくし。孟　物の棟梁なるら
ねかしんかなりし。箋　東式たち殿ちるしてまさとくらく
口をしの花のちぎりや　まここ人
の家よ八さやらへざしてかれ西よ
のとあらるととのあやく
うきまにされたるやりどぐち
細　戸口得也西ね所ならどゆゑと
やすらうちまつへ　又云　花
よろいふるさんべ　既　ありふる
ふ所物氣これぐくへ西ね所
くゆかしもしきてるやきなる
戸口よ扇をのらてかうら童
の所八さ源かなりしらく

からぬのき乃つまなどにはひまつはれたるを。口
源詞之
をしの花乃ちぎりや。ひとふさおりてまいれ
細　かのおしあけたる門八葛のやうなるを云しあけてある也
とのたまへば、このおしあげたる門に入ておる。さ
すがにされたるやり戸口に、きなるすゞしの
のひとへばかま、ながくきなしたるわらはの

門あけて惟光の綱石の　細　此
随身が花を手よすへりてさ
るまいうとうふ處へ惟光門をあ
けてまいりてうす之か
ミ年ざ源氏もいられれぬわかや
かぎをおきまとひし　細　惟光か
詞之門を遣くあけるる事
ものゝあやめ　河　文目也善悪也　孟
綾目　黒白　詩云聲成文　文
とおやとよむこ清輔朝臣奥
義抄云黒白もちしれと云
様なる事こ源氏なとを
ここちのいへき人もなさきこ
となり
惟光がおにのあざり
此あざりハひえの山の僧なり
おくちかくこうり大貮の
めのとがむすこ阿闍梨　孟安
恵内供奉　慈覚大師ノ弟子
始テ補ス阿闍梨ニ

のをかしげなる出来て、うちまねく。白き
河　白扇の事　彼童女の随身に渡之
扇のいたうこがしたるを。これにおきてまい
細　焼扇の白きにしくうなれ
らせよ。枝もなさけなげなめる花をとて
夕顔のえださのやさしからぬ花とこそあけみ
とらせたれば、かどあけて惟光の朝臣
いできたるしてたてまつらす。かぎを
おきまどはし侍りて、いとふびんなるわざなりや。
孟　不便也
もののあやめ見給へわくべき人も侍らぬわ
たりなれど、らうがはしき大路に立おはし
まして、とかしこまり申す。ひき入てをり
給ふ。これみつがあにの阿闍梨、むこの三河の
むすめなどわたりつどひたるほどに、かく
おはしましたるよろこびを、またなきことに

うぐく御おほきさふらひ。
細 尼になりて身をなくせ
源の御あつかひなどもふかく
とゞまり給はんことをくちをしう思ふ由
たゆたひしかどとは。思ひわづらふ由
也などいふ
いむことのしるしに 細 戒をうけし
くは斎戒をうけし所也
因縁をとゞめてよみかへりてせら
るゝ
御ひかりの解点なく平念之
ことわりなるべし
命ながくて位たかく
細 君暴進ありと思ふ給
つゞき給ふを見るべきと
なり
さてこそ九品の上にも
細 九品上中下の上へ九品ノ上
わが仏の御光も心清く
[illegible] 奇特
の御かけ所位をもとむと云
[illegible]

まう尼君もおきあがりて。おしげなき
身なれど。捨がたく思ふ給へつることは。たゞ
かく御まへにさぶらひ御覧ぜらるゝことの。
かはり侍りなんことをくちをしく思ふ給へ
たゆたひしかど。いむことのしるしによみがへり
てなん。かくわたりおはしますを見給へ侍りぬれ
ば。今なん阿弥陀仏の御ひかりも心きよくまたれ
侍るべき。など聞えて。よはげになく。日ごろお
こたりがたくものせらるゝを。やすからずなげ
きわたりつるに。かく世をはなるゝさまにもの
し給へば。いとあはれにくちおしうなん。命
ながくて。猶位たかくなども見なし給へ。さて

此世にすこしうらみのこるは
一念とても[illegible]のこりて此世の事
ばかり[illegible]後世の障となる
このみ[illegible]
孟 綱纜 日本紀 頑愚 延喜式
細 かたほは頑也。頑愚の心也
かたほなるとは。河海に[illegible]
[illegible]
[illegible]と云詞也。[illegible]
どもかくもわが子源氏ほどなる
[illegible]
めのとやうの人々
細 めのとは西行[illegible]
[illegible]乳母
なれ[illegible]大切によそひ[illegible]
よみ[illegible]
ひそみ 細 ひそむは顰の
字也。顰は眉蹙也ひそむ
は貝を泣くちつき也 細 ひそみは御覧ぜ
られ給ふことは尼の後悔して
源に思ふ[illegible]
[illegible]

こそ九品のかみにもさはりなくむまれ給はめ。こ
の世にすこしうらみのこるは。わろきわざと
なんきく。など涙ぐみての給ふ。かたほ
なるをだに。めのとやうの思ふべき人は。あさ
ましうまほに見なすものを。ましていとおも
だたしう。なづさひつかうまつりけん身も。い
たはしうかたじけなく思ほゆべかめれば。す
ずろになみだがちなり。子どもは。いと見苦
しと思ひて。そむきぬる世のさりがたきやうに。
身づからひそみ御覧ぜられ給ふと。つきしろひ
めくはす。君はいとあはれとおぼして。いは
けなかりける程に。思ふべき人々のうちすて

ひとゝなりて　為人曰　孟長而（史記）

かぎりあれバ　めのとはあひ
そふ事もかなはねバ朝夕に
もえあひえぬよしなり

さらぬ別ハ「世の中に
さらぬ別のなくもがな
千代もといのる人の子のため
さらぬ別とハ死別　[illegible]
まがふかたなき別といふ也
[illegible]　死をいふ
[illegible]
[illegible]
けにおもへハ　異本よけによ世に
世にハとあり　[illegible]
源氏と乳母の[illegible]
[illegible]

ものしたまひにけるなごりはぐゝむ人あま（細　[illegible]）
たあるやうなりしかどしたしく思ひむ
つぶるすぢハ又なくなんおぼえし
人となりて後ハかぎりあれバ朝夕にし
もえ見たてまつらず心のまゝにとぶらひまうづ
ることハなけれどなほ久しう対面せぬ
時ハ心ぼそくおぼゆるをさらぬ別ハな
くもがなとなんこまやかにかたらひ
給ひておしのごひ給へる御袖のにほひも
所せきまでかほりみちたるにげによに
思へバおしなべたらぬ人の御すくせぞかし
尼君をもどかしとみつる子どもみなうちしほたれ

しそく　明星云　紙燭之紙束
ともいふ
扇ハやがて此源氏とりて見給ふさき
あまたハ此乳母を問まゐらする
の趣なるべきやうなれバ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
語るとし語らうに目を
これはなれたるなり
心あてにそれ　細　心あてにゆくハ
とりあへず源氏ふかく
[illegible]
よりて花の光もそひけ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
「或説云この文夕顔の上の
女房どもの源氏の車と知
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　細流

けり修法などまた〳〵はじむべきことゞも
なとおきてのたまはせて出給ふとて
惟光に紙そくめしてありつる扇御覧ずれバ
もてならしたるうつり香いとしみふかう
なつかしうてをかしうすさみかきたり
心あてにそれかとぞみる白露の光そへ
たる夕がほの花そこはかとなくかきまぎ
らはしたるもあてはかにゆへづきたれバ
いと思ひの外にをかしうおぼえ給ふ惟光に
この西なる家はなに人のすむぞとひ
きゝたりやとの給へバ例のうるさき
御心とハ思へどえさは申さで此五六日こゝに侍れど

晴花抄并源氏其説あらし学者思惟あるへきにや

[illegible]

病者也 花鳥の看病也

[illegible]

一本ニ [illegible]

ずざのこと思う給へあつかひ侍るほどに
となりのことはえきゝ侍らずなどはし
たなやかにきこゆればにくしとこそ思ひた
れなされどこのあふぎのたづぬべきゆへ
ありて見ゆるをなをこのわたりの心しれらん
ものをめしてとへとのたまへばいりてこの
やどもりなるをのこをよびてとひきくやうめいの
すけなる人の家になん侍りけるをとこはゐ中に
まかりてめなんわかくことこのみて
はらからなど宮づかへ人にてきかよふと申
くはしきことはしもびとのえしり侍らぬにや

[illegible]

あらんときこゆさらばその宮づかへ人な
りしたりがほに物なれていへるかなとめざ
ましかるべききはにやあらんとおぼせど
さしてきこえかゝれる心のにくからず
すぐしがたきぞれいのこのかたにはおもから
ぬ御心なめるかし御たゝうがみにいたう
あらぬさまにかきかへ給ひて
よりてこそそれかとも見めたそかれに
ほのぼの見つる花の夕がほ
ありつるみずいじんしてつかはすまだ
見ぬ御さまなりけれどいと
しるく思ひあてられ給へる御そばめを
見すぐさでさしおどろかしけるを

なまはしたなき 又ハるまゝ
と書也
あまえて 此返しをせまほしき
えそして又御返事せんと云
いひしろふ
めざまし 此詞なとく慮の人
御さきの松 夕顔のこれ不詳
半蔀 女房なとしのゝ
しとみおろしてあるにや
めざましくひく
又ほたるよりといふべきに
とんての名と此段の女こ
とるをくいふにつけ
入あくし
蛍よりけに 夕されハ蛍よ
りけにもゆれども光見ね
ばや人のつれなき 細 用意ふかく
うちとけぬ 師説 此詞義
けしきことなる
の前まで来る義也
めざまし 此詞にも見し
ありつる垣根 此段一所より
かきねの事 此段にて見えたり

へ給はでほどへければ、なまはしたなきに、かくわざ
とめかしければ、あまえて、いかにきこえんな
ど、いひしろふべかめれど、めざましと思ひて、
随身はまいりぬ。御さきの松ほのかにて、いと
しのびて出給ふ。半しとみはおろしてけり。ひま
〴〵よりみゆる火のひかり、ほたるよりけにほ
のかに哀なり。御心ざしの所には、こだちせ
んざいなど、なべての所ににず、いとのどかに
心にくゝすみなし給へり。うちとけぬ
御ありさまなどのけしきことなるに、ありつる
かきね思ほし出らるべくもあらずかし。
つとめて、すこしねすぐし給ひて、日さし出

あさけのすがた 孟 朝明姿 万葉ニ朝けの形
又且開容 万葉ニ
こが…のもぐさにみぞ
てふのあさと云る也
つとめて
来しかたも 河海
よりのこともも夕顔の家
の前をとほり給ふ
惟光日ごろありて 細 惟光
一毎日ごろありて惟光と病を云
母の病を云
まいりよりて
細 五月のころより
言ひ来りての又
かくされ給ひしかど

づるほどに出給ふ。あさけのすがたはげに
人のめできこえんもことわりなる御さま
なりけり。けふもこのしとみのまへわたりし
給ふ。こしかたもすぎ給ひけんわたりなれど、
たゞはかなき一ふしに御心とまりて、いかなる人
のすみかならんとは、ゆききに御めとまり給
ひけり。惟光日ごろありてまいれり。わづらひ
侍る人なほよわげに侍れば、とかくみ給へあつ
かひてなん、などきこえて、ちかくまいりよりて
きこゆ。仰られし後なん、となりの事しりて
侍るものよびてとはせ侍りしかど、はか〴〵し
くも申侍らず。いとしのびて五月のころ

ころほひより物し給人なんあるべけれど、その
人とはさらに家のうちの人にだにしらせずと申。
ときどき中垣のかいまみし侍るに、げに
わかき女どものすきかげ見え侍り。しびらだつ
ものかことばかりひきかけて、かしづく人侍り。
きのふ夕日のなごりなくさし入て侍りし
に、文かくとてゐて侍し人の、顔こそいとよく
侍しか。物思へるけはひして、ある人〴〵もしのびて
うちなくさまなどなん、しるく見え侍ると
きこゆ。君うちゑみ給て、しらばやと思
ほしたり。おぼえこそおもかるべき御身の
ほどなれど、御よはひのほど、人のなびきめで聞えたる
さまなど思ふには、すきたまはざらんも
なさけなくさう〴〵しかるべしかし。人のうけ
ひかぬほどにてだに、なほさりぬべきあたり
のことは、このましうおぼゆる物をと思ひをり。
もし見給へうる事もや侍ると、はかなき
ついでつくり出て、せうそこなどつかはしたりき。
かきなれたる手して、くちとく返り事などし侍り
き。いとくちおしうはあらぬわか人どもなん
侍めると聞ゆれば、なほいひよれ。尋
よらでは、さう〴〵しかりなんとの給ふ。かの
しもがしもと人の思ひすてし住ひなれ
ど、その中にも思ひのほかにくちおしからぬ

めりくるすくまし久

細 宮あらくハちやうなりらんとるとさりの人ふかく貞こ
さうらハ一夜のおやうらそやさしく、さとわかりりに乞哀
とうつやうなえくし後まるかりてはけしの心かく
てさひ給ふ、まうかぬ。こく
ゐうのなりらくはそてハ
細 下の心おとふか貞あり
ふすのあつうし後南乘の物

おもく給ゆつく大人ハ
細ゐうるすとそうふもしよし
さゝ君かしめく
いかにしく物がし　中の心
下の心ゐも南乘ハ何しめ
もととん、ちらそて御ねん
のしくまこをくなりけしえ
うらもなくけれ心やくかゝる
思ひ給の後の年物なり
空蝉のあらうのも人の思

くねをえんほけなるもとめづらしうれ

なにゆかしさそひの雲隠のわたり海ちう

細 貞享節をつゞくるとそうふこゝろ

今は世に住よりひめ人八春こよ寛八つれなきこと

つまなきとこの世乃人はへうきひて物のあはれ

中の心の〳〵く之よ一夜あひみしこゝろ

ありしつるすしくありしらぶむつましきおやすら

空蝉の始めよ貞てやまんこゝとかく

めらくもやうねべつらはひとわしてかけそうや

しとんなふけて物行めるねおりすのこゝろ

こうすんをとふよりてらぬ物りてふしうやうり

なおらくすくハ物ありてらぬうつるとお

つゝし南乘のしかきこめは後つみのうし香をお

りけりなん忘れぐくのあはれにいてくまれ

細 行ふるの様し

くなりぬるいとらるゐめうりしぐうるれ

拾遺集に

さまらまくしけなうしとつゐこの人と哀

細 空蝉の御くへきほめ思へ

しかくるぬめしとあうくねどつまてる

え、まうて、ふれもしうととう
いよ、もとらく云しあり
伊予の介のありね　義伊予
今上洛住たてのおれるよあり
は任中の上洛、此まての事よ
空蝉ともくて又伊予へ下らく

伊あさこいふ河　空の御従の
後よ伊ゆうこの殺とをとひ
するのやも世ととも中川の富
かう紀伊の守の萩篁あゝし
守と云は人の思ふずゝ
さやうかくなりのあるよへと
ひかて云給てゆがきこいい
ふ何と云うり哀と照
しかさうとなりて源の
心中也

高佐ならびかく
みうらんとのなりけりしとれ
細 空蝉のかへん思てとき

このかり
のうちまもてとかわりきて行くよ伊予の事け

宇の丈は明法の

幸乱ちまり
乃がりねまりりそてき物あり、かなこうち

伊の系能くあ 細 源氏へ息よりさせ

のうわざとくもこうしみうこやうれさう様

伊予の介う答良し

をきさいとのてさよ心づゝるやうしまれと今とい

御枕はくろく
やしうねならぬよりとちらこうしめなれとさ

調行 年ゝけるとさ

げゆくうるるゝは只しきそうしつさそなど

伊予の湯桁のえう柔よし

ぞありきうゆ國の御縁ありしせ。ゆけときつく

つしとつまほしくわ殊をしおひろうくまへゆく

伊予介は源よ忠節の義なうと祇ハ予ふの方ひなめぞくるくゆ行しめせよへ

てありくろの中よかかしおろるまる海くとちう。

抛出めやうそうなかくるなのつく思もけぬかし

うずらう。やうなろかつきわさかりやさるよあれ

きのめすしね　細　夕へてうつ
ねくなうつは空蝉の貞節
なりと云ふて女院く占れ
のことハなるとくへりう雪よ
此物語ハ花と濡くつきく
ひまのうちにやハいさめ
花鳥餘情の物語の附のすく
事さとこへめしん女よんとう丘
まんへうかいざ抜君さいさ
にむ門おうるう人をとうう
まふいるのめうすしねうていなう
なとみゆひなるし作れん至連
あうらんのねくさまもつてゆう
さうましやうくしてえる段かいこ
めしハえんふ餘情抄にもね
きのいつきめうれがおかりしお
よろくいつての袖とれら
よハえてしうりをや
ろしらよえしもまされ
まふすしら紙
源氏うしの詠为て云くしく
くんひまうれて思入あふるハ
うろうこしく

ざらきのめすしね　うてはやすめなう　とじまのうこのいさ
めはすしおくいこし此しらこふつれすさんそれくと
されど人のこゝろは哀と此がりゆううじむめと
細桜よつ里子さハつよのあるうこあうは二葉をし貞女ぞとく
だきうへさひるるあづりそしふの言とこゝろてらかり
細軒端の荻とハ上くわ多くおおよお八王かうらく
めへしとさて思ひよかさだかしれにわきくて
細空蝉とハ云てまさ　花珠の荻ハおね上嫁し空蝉ハ今それ八一方
白ろねくし
らくて今一いたびハえあうらうしさうしとをやとこ
空蝉ハ云心まよへありんうちお世うくし
ざきえうきしひきくど人のこゝろとあくら世さ
細　空蝉の心くし
らんしらふくうぬうろしうるえしもまさ
れ給ありし紙おして此けるさき思てい
まさうはとぐうしくしとおひらるれさり
細文之中八うりもうつもへさし空蝉ハ其よく
さすらはさうて此すは[illegible]しあすまうんとしとも
ばかりひとつくううえきゝしをはうひくそうざりくんここに

うけの筆法ハ　河　夕けハ夕じ
かさろなり　秘　夕とさり此筆
つひひあり袋　夕とさり此筆
つひまて又同じ同と雨の人まう
かりすとどらうつくさま
うまとも調よるなり
枝ふもなりね　盃　木のまへ
からうろ月の影されバ出て
しの荻ハ事よろう　此亨
まくうろ涌く
人やりあらぞて　細　此君心く
こ歳之筆の所まて空蝉のうす
らくらんゆうしせ
六条ハうち　ふも　細　夕ひき
うことさといろくしさ世
うれハ真細とありとうぬ
秘ざ一度とはんふものうら
にさくまうもうさとく

つらくの此とくなしがうりしくさくうて法は
さげのわざくづつひはつけさらしの紫おやし
うらうらげよめとむまそべさふしくくるで
しても哀とハ此頃しとくさこ人のめくひまされバ
源氏さ
つもえすくわさきめのくもそれかさはや此けやと
細　彩瑠荻之　細　人の此みくるさく　源八こら御ら
いまへこさくぬしつらくいりな先ずとくむそうら
ゆきぬんほらん
とけめくべくうししさ[illegible]おうりよすめのをてどうく　かねよ影
空の荻を嫁正く御法之
らくしつゆふんどれらそうまら　ごうすぞあうる
いろく細々の二人所念く
秋ふのよりぬ人やつまあくらぐらん怺くしてり
此も同しさうしとえあゆで大殿よいそそ
まゐ
ほよ正一へてうしめしくのとせひさらくうまうり
夢の源どく
六条のうちかもとけびうりし御氣色と云

とけがたかりし御けしきをおもむけきこえ給ひてのち、ひきかへしなのめならんはいとおしかし。されどよそなりし御心まどひのやうに、あながちなる事はなきも、いかなることにかとみえたり。女はいとものをあまりなるまでおぼししめたる御心ざまにて、よはひのほどもにげなく、人のもりきかんに、いとゞかくつらき御よがれのねざめねざめ、おぼししほるゝこといとさまざまなり。霧のいとふかきあした、いたくそゝのかされ給ひて、ねぶたげなるけしきに、うちなげきつゝ出給ふを、中将のおもと、みかうし一まあげて、見たてまつりおくり給へとおぼしく、御几帳ひきやりたれば、御ぐしもたげて見いだし給へり。前栽の色々みだれたるを、すぎがてにやすらひ給へるさま、げにたぐひなし。らうのかたへおはするに、中将の君、御ともにまゐる。しをん色のをりにあひたる、うすものゝもあざやかにひきゆひたるこしつき、たをやかになまめきたり。見かへり給ひて、すみのまのかうらんに、しばしひきすゑ給へり。うちとけたらぬもてなし、かみのさがりば、めざましくもと見給ふ。

さく花にうつるてふ名はつゝめども　をらですぎうきけさの朝がほ

いかゞすべきとて、手をとらへ給へれば、いとなれてとく、

とけがたかりし [illegible]
御息所と今も [illegible]
[illegible]
細　御息所は源 [illegible]
源氏十七御息所ハ廿四 [illegible]
細 [illegible]
秋好中宮を生給ひし後 [illegible]
[illegible]

[illegible]
河海 [illegible]
河云 [illegible]
[illegible]
蕣花
詩云有女同車顔如蕣花

頭中将の [illegible]

[illegible]

花の [illegible]

[illegible]

古今序に [illegible] 山人の花の陰に [illegible]

重生男重生女 長恨歌

[illegible]

細 つま・を

つまくゝりすゝく
夕顔は車のおとくろきなど
それハおもくのそきなど
もうさ此君二階作り等
のやうにさらく作りたると
みえたり
孟 橋のおもて中垣よりわ
たるやうにしたるひたすらはし
ば也

師 夕顔の花
右近君こそ
このむすめのめのとの子也
下の紙にも右近と見え
おり

りのかいまみは、いとよくあないみとりて申す。その人
とは、さらにえおもひえ侍らず。人にいみじく
かくれ忍ぶるけしきになん見え侍るを、つれ〲
なるまゝに、南のはじとみあるながやにわたり
きつゝ、車のおとすれば、わかきものどもの
のぞきなどすべかめるに、この主とお
ぼしきも、はひわたる時侍るべかめる。かたち
なんほのかなれど、いとらうたげに侍る。一日(ひとひ)さ
きおふ車の侍りしを、のぞきて、わらはべの
いそぎて、右近の君こそ、まづ物見給へ。
中将殿こそ、これよりわたり給ひぬれといへ
ば、又よろしき大人いできて、あなかま

いで此葛城(かづらき)の神こそさがしく
此さがしハ険岨なりしくとて
つくゑし事也 孟 金峯山縁起ニ
云、役優婆塞金峯山与葛
城峯為行通於両山召集
諸神令渡橋之時金峯大
神不勝呪力而且作始之
葛城一言主太神又且始
作中於行者云自形尤醜
夜間作云云
君ハ頭中将をさしていふ
孟 惟光が車よりのぞく人
をこれハ中将と察して源
氏へしらせ申也
頭中将の随身 細 頭中将の随
身また小舎人童なども見しかば
小舎人ハ童の也
夕顔の事

と、てかくものから、いかでさはしるぞ、いでみん
とて、はひわたる。うちはしだつものを道に
てなんかよひ侍る。いそぎくるものは、きぬの
すそを物にひきかけて、よろぼひたふれて
はしよりもおちぬべければ、いで、このかづ
らきの神こそ、さがしうしおきたれと
むつかりて、物のぞきの心もさめぬめりき。
君は御なほしすがたにて、みずいじんどもも
ありし。なにがしくれがしとかぞへしは、頭中将の随身
その小舎人童をなんしるしにいひ侍
りしなど聞ゆれば、たしかにその車をぞ見まし
とのたまひて、もしかのあはれにわすれざ

それなどを猶し
かのあはれにわすれざりし
[illegible]

[illegible]の[illegible]も
源の[illegible]とれ
[illegible]とて
[illegible]も惟光もわ
[illegible]の[illegible]にて
[illegible]案内[illegible]
[illegible]出[illegible]用
[illegible] 細 主人
[illegible]に
[illegible]して惟
光も[illegible]
[illegible]夕顔の[illegible]惟光
[illegible]女房
[illegible]人
[illegible]これ
[illegible]
[illegible]惟

細 [illegible]の車の内の中将の[illegible]源の旅

ましと人にやと思ほしよるもいとしらまほしげ
なる御気色を見てわたくしのけさうもい
とよくしをきてあないも残る所なく見給へ
をきながらたゞわれどちとしらせて物などいふ若き
おもとの侍るをそらおぼれして
なんかくれまかりありくいとよくかく
したりと思ひてちいさき子どもなどの侍るがこと
あやまりしつべきもいひまぎらはしてまた人
なきさまをしゐてつくり侍るなどかたりて
わらふあまきみのとぶらひにものせんついでに
かいまみせさせよとの給ひけりかりにても

[illegible]
師説 帝本[illegible]
[illegible]
[illegible]後漢
書列傳第六王蘇竟傳ニ文
与仲況書諫之文多不載
又云 此筆法ニ[illegible]

やどれるすまひのほどを思ふにこれこそかの人
のさだめあなづりししものしなならめその
中に思ひのほかにをかしき事もあらばなどおぼ
すなりけり惟光いさゝかのことも
御心にたがはじと思ふにおのれもくまなき
すき心にていみじくたばかりまどひ
ありきつゝしゐておはしまさせそめてけり
このほどのことくだ〳〵しければれいの
もらしつ女さしてその人とたづね
出給はねばわれも名のりをし給はで

わりなきとは　源の忍び給ふ事也
りけさうには惟光がかゝる事は源との
せず我はなりがたく思ふ也
ありくべし
けさう人の　師説　これはざれ
ごとなり細く流れ人には惟光
が我しも又ゐるまじくかたりぬす
こいなしといふ心もさとしは惟光
に夕顔の方に源の方も
人とみるなどゝして世のかたらち
あやしきまで思ふ也
て源の此をとまるをもとも夕顔乃
流の事もあらじと也

いとわりなくやつれ給ひつゝれいならずおりたちありき給ふは、おろかにおぼされぬなるべしと見れば、わがむまをばたてまつりて、御ともにはしりありく。けさう人のいと物げなきあしもとを見つけられて侍らんとき、からくもあるべきかなとわぶれど、人にしらせ給はぬまゝに、かの夕顔のしるべせし随身ばかり、さてはかほむげにしるまじきわらはひとりばかりぞゐておはしける。もし思ひよるけしきもやとて、となりになかやどりをだにし給はず。女もいとあやしく心えぬこゝちのみして、御つかひに人をそへ、あかつきのみちをうかゞはせ、御ありか見せんとたづぬれど、そこはかとなくまどはしつゝ、さすがに哀に見ではえあるまじく、この人の御心にかゝりたれば、びんなくかろがろしき事とおもほしかへしわびつゝ、いとしばしばおはします。かゝるすぢは、まめ人のみだるゝおりもあるを、いとめやすくしづめ給ひて、人のとがめきこゆべきふるまひはし給はざりつるを、あやしきまで、けさのほど、ひるまのへだても、おぼつかなくなど、おもひわづらはれ給へば、かつはいと物ぐるほしく、さまで心とゞむべき

そこらくしなくおぼしけり
夕顔のやどりは源の御心に入て
そへてめ乗とゞめ給へと也
は又源の御心さまに人にすぐれ
てありしを見るもとやがて
心のかよひしかたもなし
にかまへがたし
きこえなまほしく　秘あり
さ源は見つれぬやうにかくして
物しのびて見ゆる也
しのこぬゆへにさてぞ
かなはぬし
くずもとろいは　盖 賓人の之
まづいとまされたるの給
みをなかし　これは夕顔に
いふ心も　登徒子好色
の賦に　宋玉　臣東家之子
大夫世に賢人大府と稱せ
しかるれど好色のため
はされしとぞそれを賢者の
一笑とはかひしるもあり
あさぬ術ひかるの心へとして
登徒一目不見如三月　毛詩
盖 夕顔の宿　かり給ふて乃

細 あのやうしもあれ
もとしくはてかんくかくるく
るらへき常衰し
いとあさましく 比ひかも
ちよやりしるよ地所ぞのさ也
うるとあるさましらしいうそ
やうらるよ地所どくさて
柔和よやうるさ戔お
まり華和るを乾よ地もくし
きりるのらくるさきれ
ど三位中将の頭中将の
限りの流華の族のえし
ゑくしぬりもて おかしき海く
人のとあるつきさ海るもあ
らぶてとこゐるゆんかまくと
いあし
細 三條の嫡の卿の平緑かく
まく川より海海 三位中将
和延への皇臣龍姫命よか
しい日本紀の
とも御事いみくとしてよ

むかしいつもしくさひさましきかくへのけれ 細 思ふの女乾の様子とつき
ひいとあさましくやうしくよ地得どとまて
ものよくどりきさへにとられてひさきあか
まりりぴさりのりし世どまさきちさねふも
あくらぞいとやんごとしるさまはいあるまじいづ
くまいとかくしをしきうんぞしくゆやて地所
もぞいかにもきうそくはたくしくとよ
やうれさうりの門ぞ紙をすりいて面をとうへり
やとも御のきせあのんぞ夜あきて任まんを
志河めく出いりるざしまあへば出すう
ありきんよのゝ面んく思めきそうしてしぬ忘
ひなけうれどゝ人の川出そんひかりさはさ

ひあのみくし来よ落て云来常にひのいろくむぞ嫡のかたちとなりるのくしねがらくへあつくく
うじまれどさちとえんどこうるくのりく忍びかしけのありるよとらん丹ぞらく手るれ
尋ねてつけとかくるてこらふ小帷おり汗衫衣御のぐとし下界
まさらん めもきさき ありくありく人くいまくまひもいちさつさしるへ
猶ぞらりよりいあくん
彼所ぞのうらねの人あかん
られとつかがかうしてありう
とす大夫の大輔と云侍者
うみを あらそくるを民部大輔とも
かうりい あさいかり侍る扶
宮ともらい 誠 いいは 叙爵の
叙爵あるべし 細 元服後よ
名字をとつくてあるか八惟光
良清二人せらぞるきて宮
をさして云人多きに出あるき
除目の申文よ揚名介の申文
よ惟光ちは清ありそく文は
護よけるく面白く御うるぞ
かくるハトのいりるるまでを
去なへか当てえるへし
女ゆるしもあやしくう
よのつれい男れん涙らさとこ
を弱くへさにい是ハんぜしい

まことにとふうきわざなされたも惟ぞくりくぬ
つかあらんねらのむくさのふ志らぞく侍う 惟光強面
わざるあまりとこいふあどらさざひあまうふせめ 細 此詞惟光が志らでさうすと此女の志はすると 惟光と名夫こ
てつれなくさしもで凡みくぐけくさひ よ源氏のうちひかふちの御人よ志らぜてかぞもくさ
かくねさ面あしる母まんすあぶれありけれ 由断なく 是 されイ本アリ
いうるこゝまうしこころえてうく女ども
もあやしうやう女のひしうぞせみひとかりん 秘 打点のくいさうりまそむくべきとやうハみそしされ在自
志せう見もりくうしう面めりくひらにれ 然ふとぃぞへもむてハとさ語之を面めて八由断させそこ
あはいでとつりとゝわきまもようるよむらり 細 此宮こ
そかりのこれ御ととさら拝みんれハいづうさふも 実ハ勤肉の前りとみえより実きくり不思あるべきこと

源氏にはあふぎを詠ける
ぬ物語にひかれたるのつね
の物語にひかれ桜の花を
しく
一説にとくくりて
いせ物語のことはなり
とひすとりして其のゆゑ
給はとひよりさまよえ
さとひゆく恋すくなり
くりとも久しさまいれ
ゆべくいとく
のしまへありて
世上すでにきこえて
おりてもとくふくなまふ
すくへし
へらかくらんにあひかん
ゑくふあさかくすぬかをそ
かくは世のさてくもなり
あれて二条院へむへんを
がさんをふくめて三返

くりかひゆん日といつても忘らじと契りをきて
とひすだにしてるのなみに思ひすし浮べくかで
うぢかのすさひかくもそくかめべくこことと。
さくまさてむぐしせんと契りされむ、ひとめ
と契りしてへだてとさき結びしれりくるだにいひしを
のびかくうらめしさまで世のわざくきへれ
それとすくて二条院によむへてんりけの
ありてがんなるべきこしかるともござるん
きこまそ扱ちかるすしいとうくへみ
しむことはすきといふすかりよのいあり
きんすど世の中しるいさいとんやまきき一派
よろくのどうふこしんるすどくくらいの人にし

しげるぬ　よのなかすぬんく集
ともせすのでくかともえ
せめかぬとのつく
いつれかまさるといふらんみ
孟をあさかりとりくりにさき細
さうんちるゝとし
よぞかゝれてり候し師説
わ道と褒代めそて此ほろ
しふずくまさるこゝのうちくさろ
れどもお世すくいまうひあ
まくいあるもこも流るらん
かそりがらしらくいでごえ
かくれあへりしとふことい
しるりくこともあれせ何わ世
よそらくれて人こそかくえ
藤はらるくれいなる二これ語
へのそくろく
とこすらきこうかしく
帰本まされるんえこの何
まりくこのりあたきき方
えろりと中将のそしきと
あらかやくしこそは
孟母聚の抱脱の何のるよ
此がりめしあいせこれどもも

細夕乳上詞に
みどとおやしこうくいのまへどようりぬれすそ
なしすれがりの世そうしくこそあれといひし
まろびて以へだえそれと頼りそれるそ前にへつ
きうまろねさせん気のそさそうくれのへりしに。
かくろしげよのまへとで無きもいゝしくるひとそ。
さもありめへうをひかり。世よろくくそまむ
ゞんこしかりともびのさふるまえてかふいと
衰げすらひとくころまよるなりの歌中将の
とこかろらきがはそくそりしんふ御ぞう
思むくれのまへとで思ふやそしそえとゝのみ
ぐらよもとらひ物語つどで気色たくそしふとく
そもひきくらべさらて御れどしいるもつれだく

夕皃は美しくして只今ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]面白し
[illegible] 細[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

八月 ハヅキ ハツキ [illegible]

あかりつひ 毛詩生民之篇
誕后稷之穡 所乃切 説文 穀可収曰穡
文選仙靈云 家業倫譜
河民業
在穡農 順和名 東作稼穡
日農業 日本紀 田宅 同

くれ[illegible]
にける[illegible]
しき[illegible]衣たまへ[illegible]
とをん八月十五夜ハくまなき月
かげひまおほかるいたやのこりなくもりきて
みなれたまはぬすまゐのさまもめづらし
きに暁ちかくなりにけるなるべし となり
の家々あやしきしづのをの声々めさまし
て あはれいとさむしやことしこそ
なりはひにもたのむ所すくなくゐなかの
かよひもおもひかけねばいと心ぼそけれ きた
どのこそきゝたまへやなどいひかはすもきこゆ

ゑんだちけしきばまん[illegible]
細 夕皃の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]職[illegible]
[illegible]
[illegible]
ゴホゴボ 称名院点
ゴホゴホ 三光院点
盃[illegible]
[illegible]蜻蛉記[illegible]
[illegible]
[illegible]

いとあはれなるおのがじゝのいとなみにおき出て
そゝめきさはぐもほどなきを女いと
はづかしく思ひたり えんだちけしき
ばまん人ハきえもいりぬべきすまゐの
さまなめりかし されどのどかにつらきも
うきもかたはらいたきことも思ひいれたる
さまならで わがもてなしありさまハいとあて
はかにこめかしくて またなくらうがはし
きとなりのよういなさをいかなることゝも
きゝしりたるさまならねばなかなか恥ぢかゝ
やかんよりハつみゆるされてぞ見えける
ごほごほとなる神よりもおどろおどろしく

踏舂臼也　砧　又作碪

白妙の衣ら川　細　南楼月下ニ擣寒衣 衣まで
みれども白妙にそひのぞうら
優にして面白し 若よ
まし白き衣とらうされ之
素より色のまゝなるを
録き雅也

これより呉竹の　細　枝の
ゆふごとのとしてもどかるぬ
竹く、翫揺閣作それらや
いまたゆるまことよろぢなるを
此竹ハうしけられて行
なるへし・やせさしかひの
せう行とよみ也。若後ハ
枕也とそ

ふきとゞろくさとゝくとしこのゆふべもまく
らうちしけ行ゆふぐれさりしかも　と次
おれみだし世行くらしるのみの初こさ
おつれのゝえれいとおやしくらめざくりしき
とゝろひとのき聲のすふくだくしきくと
乃きゆけらあさろもへの衣ら川さあるこ乃
着もくすろまきこゝるこきこわさされ定
とぶらの鳥をりあ川めくぐ思ひいてさきこ
とゆかりけらうるきゆかりし所なりきれ
やりぞ・どひてあけまでめろとまりとき
しあふ領なる庵まされるくられ行若
織の字ハ手紙り所もゆのしく

くくの卅乃きりくとも
細 花を待の七月の篇よ
十月懐擣入戦床下と
あり　ことを思ふにしても
る御事ハさしわそうろ
まりにしてあり　ハ戦床下
にも入るのそろならを見
まことそくらの事ら
のあらりかすとよハ名
竹らん但懐擣 ハ宴衣
こゝろよくこゝろもうら
しうき富よてハまづらく
ろく後とをゆへしこゝろ
此頌とするへし
細　夕魚上裳
裳也　明　ひそくうかり
花白きあるせのきぬよう
を夕のうりさとそろ
へし

ゆふこゑろり雲のはし思ひくらぶぐりくくう
への巻のはさりくとうちにもあれ
まへしひ猶の海みてよきあてゝるや
うきよるまこもふろふと夫へく
もかれにてとしもうへ
ちゝまりもくさめしるからにそ
ろくぬまこみ川のうちゆうさ
まりしたそきこあるせ　色の
ゆるゝとゝのねてあそあやうき
いとらうさけるあへりをろくらうもし
ことぞらりよてくさくれうともあれ
どりをかゝらしひくしてをのゝかう
ふひらけらひありをうろかしのをく

いとらうたく見ゆ。心ばみたるかたをすこしそへたらばと見給ひながら、猶うちとけて見まほしくおぼさるれば、いざたゞこのわたりちかき所に心やすくてあかさん。かくてのみはいとくるしかりけりとの給へば、いかでかにはかならんと、いとおいらかにいひてゐたり。この世のみならぬちぎりなどまでたのめ給ふに、うちとくる心ばへなど、あやしくやうかはりて、世なれたる人ともおぼえねば、人のおもはん所もえはゞかり給はで、右近をめし出て、随身をめさせ給ひて、御車ひき入させ給ふ。このある人々も、かゝる御心ざしのおろかならぬを見しれば、おぼめかしながらたのみかけきこえたり。あけがたもちかうなりにけり。鳥のこゑなどはきこえで、御たけさうじにやあらん、たゞおきなびたるこゑにぬかづくぞきこゆる。たちゐのけはひたへがたげにおこなふ。いとあはれに、あしたの露にことならぬ世を、なにをむさぼる身のいのりにかときゝ給ふ。南無当来導師とぞをがむなる。かれきゝ給へ、この世とのみはおもはざりけりと、あはれがり給ひて

金峯山にまうでんとて千日精進してまうづる也

天皇二年に金峯山に蔵王権現あらはれ給ふなり

細 礼拝也 河 額突

稽首ヌカツク額拜ヌカヅク也地祇ニ三　あそびて額拜ヌカツクと云く　万六帖　おひおちぬ人とおりにハ大地のうへにあふげバかなしくもあるか

いと衰りたるの声よ　源氏のちやうしゃなりてハ現世の祈をせずして来世を祈りかさ

ねてもつれにさへ申をもこれハ南無當来導師といのる也　河　朝露ニ貪ス名利ヲ夕陽ニ愛ス子孫ヲ

南無當来導師ニ　細　金剛蔵王ハ過去釋迦現在観音當来弥勒也弥勒の

き金とせり給ふ也仍みたけ精進して弥勒を礼する也弥勒ハ釋迦の付属にて一生補處ノ

の菩薩として五十六億七千万歳の後に下生して法を成佛して三會にて説法をもくへ

ころへく　明　此礼ある事ハ見れば子細ある事也よく来世ニ

れうくちらん　孟　源詞也夕良ハ此世ばかりの契ならぬ事をしりてか今世をも

もこの世のちならぬ契をむすびて来世まで契りにむすびて来世をも

と思ひやりたれども此歌のことばハ此世ばかりの事ならずといふ也

けうかくへ　細　南無當来導師

師といふ声をとりて来世の約束

まてと契をすぐべきならん

ちぎりそくがとかいふ山の推

かはしおのかみそこひしとし

みそあきねて

河　優婆塞ハ俗なから佛道ニ入て修行する也

さまて入へく四部衆の一也

涅槃経云善男善女受三

歸依是則名為優婆塞

孟　七月七日長生殿夜半

無人私語時在天願作比

翼鳥在地願作連理枝長恨哥

源　うばそくがおこなふ道をしるべにて来む世もふかき契たがふな

長生殿のふるきためしはゆゝしくて、はねをかはさんとはひきかへて、弥勒の世をかね給ふ。ゆくさきの御たのめいとこちたし

さきの世の契しらるゝ身のうさに行末かねてたのみがたさよ

かやうのすぢなども

師　玄宗と楊貴妃の契ハ末とげずしてはかなくなりぬれバゆゆしく

てとそとりなへりとハいひて源ハそのためしを引ずしてへだてなく

しもかく此うへにおとらぬ心なれバいはんかたなし　万　輪廻ろくなどの心也

しらし　しらへしさ侍　河　從此ニ其入滅至乃慈尊出世ニ隔五十七俱胝

六十百千歳云々弥勒下生経にハ将来久遠劫於此國界成佛ニ云々

まれの世乃　抄　さきの世ハ契と八前世の宿因也宿因つくる所なれハ現在つくのさそ

よれ哉とやかしと身つてちかきとうち思ひそらし此人ハ未来まで八不

このあるべきとも　明　見次在因する未來の果を知べきなり　細　身のちぎりのうさをちかふよう

みらんのよらん　細　源のいふまゝに世々の事を抱ても不信すれバ此人に心を

かりすく思ふ成く　基　作者の批判に此事ハ抱えたる様ハ早世の前表にて風躰純く思ふへし

やうふ月よ　細　満月に出る也

これ切り。実ハいさよひの月の

入かよ山の端によりかねるを

云ふ心也　孟　河海ニ山の端よいさよ

ふ月をやいでんとするらむ

うなよ都でしたよりのさだめき

代のほりて出やらぬとぞ云ふ　小月

のいでとハ十六日の月の山乃みのいづ

るよしいさゝよいひやすらふ

猶ハ猶豫イサヨフと書り

万の十ふる八十ちゞ川のあなこ

まよいさよふ波の行末をも

もこれをしらまし安らふ遊ひ

万葉にハ不知夜經イザヨフと書り

しちうて十六日の月の出やらぬさま

さるは心もとなかめり。いさよふ月に

紫　月ハ山の端に入へく

ゆくりなくあくがれん事を。女は思ひやすらひ

ていさよふ月に女もまたいさよふ心をもちて思ひやすらひて

とかくのたまふほど。俄に雲がくれて

安明ハ俄に雲がくれて

あけゆく空いとをかし。はしたなきほどになる

源のいつもいそぎて出るよし　夕良と源

らぬさきにと。例のいそぎ出給ひて。かろ

のせうく車よりいそぎの世まつく

らかにうちのせ給へれば。右近そのり

そんなやうその時と云

ぬる。そのわたりちかきなにがしの院におはし

ゆくりなく　細　不意也。卒尓とも書也　孟　水原抄云ゆくりあへぬなど云。率尓之不意の義ハゆくりなく也
思ひかけずもおもしろくなり卒尓も今の心に叶へり
なにがしの院　細　河海にみえたり河原院也。又号六条院。後ニ宇多院御領也。延喜御記ニ曰此日幸
六条院ニ此院故左大臣源融朝臣宅也。大納言源朝臣昇進奉故院ニ
あづかりめしいづる程
細　平生人もすまぬ所なり。院にはあづかりありて守る也　孟　諸
院に別当あり。河ニ委

あづかりめしいづる程あれたるかどの忍
ぶぐさしげりてみあげられたるたと
しへなくこぐらし霧もふかくつゆけきに
簾をさへあげ給へれば御袖もいたう
ぬれにけりまだかやうなる事をならはざり
つるをこゝろづくしなることにもあり
けるかな
いにしへもかくやは人のまどひけん
わがまだしらぬしのゝめのみち
ならひ給へりや

山のはの心もしらでゆく
細　夕良の哥也。山の端ハ月と
しらでゆくとハ心もしらで
ゆく月のゝ心ハ山のはと源の心も
しらずして
あらしべし
のゝめのみち　明
と人の通ひきたる家居のありさま
物しきなど　孟　五条の小家
へおきて物をうつしおもひたると
夕良の心を源の思ひやりて
あはれがる　孟　敬愛　安嬉
うやまひをこたれる一段経営
奔走と云ふ音様通ぜし
このわたり近き所ニもなりぬ
細　此院のあづかりの出家故に
て源氏ゆかり

やまのはの心もしらでゆく月はうはのそらにて
かげやたえなん心ぼそくとて物
おそろしうすごげにおもひたればかのさしつ
どひたるすまゐのならひにこそと
をかしくおぼす御車いれさする程西の
対におましなどよそふほどかうらんに
御車ひきかけて立給へり右近ゑんなる
心ちしてきし方の事なども人しれず
おもひいでけりあづかりいみじくけいめいし
ありくけしきにこの御ありさましりはてぬ
ほのぼのと物見ゆる程におり給ぬめり
かりそめなれどきよげにしつらひたり

師 前より源と推しはかり
それなり
ありまして下家司にて
侍るなり
細 此預りハ源の家司也。侍
はもとハ葵上の御方へまゐる
師 大臣家にもつかへまゐる
ことぞとむかり分ようち
もたらし口かため給ふ
よりつゞきはまうくなしたり
あふ(?)ぐ
孟 うちあはぬとハ給仕の人もなき
きゝしれぬ人も見ひ
られじかし

おきなが川 細 川の名 鳰鳥
のおきなが川ハ絶ぬとも君に
かたらふことつきめやハ
水原抄 此川の名いひかけたるわ
きみとを(?)沖中川ハ絶ゆる
ことなり。鳰鳥ハ息長き
鳥也。よつて鳰鳥の沖
中川といへるなり。翁が
河の名也。萬葉 沖中川ハ

御ともに人もさぶらハざりけり。ふびんなる
わざかなとて、むつましきしもげいしにて、
とのにもつかうまつるものなりければ、まゐり
よりて、さるべき人めすべきにやなど申さすれ
ど、ことさらに人くまじきかくれ家もとめ
たるなり。さらに心よりほかにもらすなと
くちがためさせ給ふ。御かゆなどいそぎまゐ
らせたれど、とりつぐ御まかなひうちあはず。
まだしらぬことなる御旅ねに、おきなが
川とちぎり給ふことよりほかのことなく、
日たくるほどにおき給ひて、かうしてづ
からあげ給ふ。いといたくあれて、人めもなく、

ふきとなきといへハおなし相通也
人の名にも息長足姫と
云あり上の義とおなじくせ
おりて鳴鳥の中と
つゞく
秋の野らとハ 孟 里ハ荒
て人ハすみかえりて庭
も草も秋の野らのやう
なるのさまなり
細 別の屋也。小寝屋なと
いふなり。雜舎也。納ハ当
字也
さりとも鬼なども
是ハさき前栽を我をバ
ゆるしてんと源の給ふ也。女
自慢の事なれど女の恐ろ
しく思ふを慰めたまひて
わたる心地なり
うちとけたまひて面をかく
しておハしけるを 細 昔ハ
ひざの神などにも霧
よせてや女物もくし
ぎりて面よりくし
るにかなしきこと

はる〴〵と見わたされて、こだちいとうと
ましくものふりたり。けぢかき草木など
ハことに見所なく、みな秋ののらにて、池
もみくさにうづもれたれバ、いとけうとげ
になりにける所かな。べちなうのかたにぞ
ざうしなどして人すむべかめれど、こなた
ハはなれたり。けうとくもなりにける所か
な。さりとも鬼なども我をバ見ゆるしてん
とのたまふ。かほハ猶かくし給へれど、女
のいとつらしとおもへれバ、げにかばかりにて
へだてあらんも、ことのさまにたがひ
たりとおぼして

師扇の紙の事なく　細　これと
夕顔よひかりといふ心あてそ
その見しうちとつくる心あて
よそれかとぞ見るしら露の
しどろけくしもしと源氏
師ひかりくハとうしうち歌を
あつかりうへ見えハ源氏の源氏を
う歌とおもひまつりて夕がほ
えなふさの夕顔の本とと
とうかの事よくしりかえん
とかりつしらうし
露のひかりやいかにと　細　夕顔
かしはのかげと思しのまへり
んおそよそれかとみる白露
の光そへたるとありし光の
いうはとなり　細　扇とありし時
いう答に和せられけるうへ
ところとも思しかくをと
と此源氏いひしとえる也
かくて心あてよそれかと
そこらの手よそしいさ
きはの雲めかくありけり

ゆふ露にひもとく花ハ玉ぼこのたより
にみえしえにこそありけれ露のひか
りやいかにとの給へバしりめにみおこせ
て
ひかりありと見し夕がほのうハ露ハたそ
かれ時のそらめなりけり
とほのかにいふをかしと思しなす
げにうちとけ給へるさま世になく
所がらまいてゆゆしきまでみえ
給ふつきせずへだて給へるつらさにあら
ハさじと思ひつる物を今だに名のりし
給へいとむくつけしとの給へどあまのこ
なれバとてさすがにうちとけぬさまいとあい

入る夢の詞のうへみえし八そのことはりならし
もとはこのうちひとつきハのんかりし
の海女の夜詠ありしよし夕顔の
ぞうく詠ありや
あまのこなれバ　白波のよするなぎさに世をすぐす
秋うちきのしと恨み詞ハうち
ひかる　師　あまの子と共の
いふまつをそへしにたとひ君を
しりませくまさ今のこ
なうぶれバなかの歌の心
こしうなりとうつく
つハ又くうもひかるとかや
源氏の方をよそひし時の秋
うしとねとそともある
世をいふとも
ものいふ方　細　これら
うみく手が方の上のやう
まにおしてうくかりしを
なく　孟　惟光うちよはこち
うくしうろと右近が恨を
ん様ありくもよりしと
おそぶかしつぬく
わがいとよく　細　からの惟光

だれたり　よしこれも我からなめ
りとゑんじかつハかたらひくらし給ふ惟
光たづねきこえて御くだものなどまゐらす
右近がいはんことさすがにいとおしけれ
バちかくもえさぶらひよらずかくまでた
どりありき給ふをかしうさもありぬ
べきありさまにこそハとをしはかるにも
わがいとよく思ひよりぬべかりしことを
ゆづりきこえて心ひろさよなどめざましう思

うつひよりてわかゝねみゝも
とへさきめあくなりつく

しこうしうちとけあり
つゝまうちてあひ夕顔を
いつハ夕顔の六條の御息所
そくにハたゝハまことに思ひ
らとあやしくあるべし

あはれなるありさま
源氏いかにてあらんまゞ
すこしをかしうちとけ給ふ

たとしへなくしづかなる夕のそらを
ながめ給て おくのかたハくらうものむつか
しと女ハおもへれば はしのすだれをあげ
てそひふし給へり 夕ばへをみかはして
女もかゝるありさまを思ひのほかにあやし
き心ちハしながら よろづのなげきわすれて
すこしうちとけゆくけしき いとらうたし つと
御かたはらにそひくらして
物をいとおそろしと思ひたるさま わかう
心ぐるし かうしとくおろし給て おほとなぶら
まいらせて 名残なくなりにたる御ありさまにて
なを心の内のへだてのこし給へるなん
つらきとうらみ給ふ 内にいかにもとめさせ
給ふらんを いづこにたづぬらんと思しやり
てかつハあやしの心や 六条わたりにも
いかに思ひみだれ給はん うらみられんに
くるしうことはりなりと いとほしきすぢハ
まづ思ひきこえ給ふ 何心もなきさしむかひ
をあはれとおぼすまゝに あまり心ふかく見る人も
くるしき御ありさまを すこしとりすてばやと
思ひくらべられ給ひける よひすぐるほど
すこしねいり給へるに 御まくらがみに
いとをかしげなる女ゐて おのが
いとめでたしと見奉るをばたづね思ほさで

細 源の心ハおそろしきを女にいひなし給ふ
源の我ハ夕顔にいひ給ふ
源と夕と
夕の心
細 源の御心ハおもひもよらぬ夕の心を見給ふ
源の心ハよろしと夕のおもひてみるも
細 源の我ハおもひ給を夕の心をおもふ
源の心へ傍中よりいはるゝことをとくらむ
源の思ひの外につらく御ありさま
細 六条の御息所一たびのけしき
細 御息所の心ろくへし
源 詠上

いとかゝるひききぬれ
夕顔ハよそへしく御集へ
まつれうきねぬなり

たましゐもあく
細 此夕顔の上ろあはれなり
みだりかはしくもてなし御息所
の事御ふうしとゆづろ
へきこと 源の思ひくらべ給ふ
ころふに思ひ給ふとえて
早くも通ひくるりや夕
自らのありがたさそさ
しもひの心をそこと御息
所の心ちくらくらうしき
心を思ひくらべてさまゝ
思ひもへ私とりはなしハ
のありくるへつくり用捨之仰
世の流れりるしとそ

こゝろうかりけるよと人も
細 夕顔上ハ三位のむすめなく
き俗姓もしもなきを〳〵
こゝろよりうみたりといへ
ま又ハ御息所の事より
き類をまよひまどひたぶ
りきりといひ様なくさまも
かき人の思ひより孫
ともうへ出給へる

山びこ 孟 山彦 古
古こゝろ深くしるべきてん色にて山びこ

ほのぼのとしたまへる人をみそかにし
てしきめりしかそいとめでたくいた
らまれしてこのかゝりしの人をとこれ
こきんとかしこまりのかどそくうらい
らしてかのちきまつれハ火もきこえぬり
　孟 横刀 日本紀　細 夕顔の事　源の人　夢かたりて
うちてかなきされバさらにとさぬさたく
　かきろく思ひて
もら事のてたくをとかくしかふかれにもかそ
　細 源の
ろきとかひさる陰ゆくまかりけり
きる歳かゝらとのおどろかしてさそくこして
　たとまの給こ
まかれど人しのすまんへたいぞうまか
くゝかれハ此きからききとも
　細 たまの所に
らくうでといんでおおりかくしとさし
　源詞
もゝしひまひらいあくとくしこさ給
　孟 てうしあるか
（いかにいひ）

これのかしれ 孟 奏ぐふ
も何ともなく帰れども
まれりもまかふかり給ふ歸りき
今〈寒〉冷の躰詞に無けれ
あまひとのをとつき
しこそ今ハ世にまされ
今も身をとかくらせり
　細
はかなのか
ひとりもそくそのこ
まの病者の室をみなハ死ね
の一かりとこしの今夕顔
のま痛らにはあかくさる衰
のかハ物列あらひ染ぬり
しよ源の心給へ

のうちつけのいとくらいにて人もいひく
　細 夕顔上く
じきゝぬよこの女房いきしくわすへきま
　細の者なるきこえたる様に
どひていつゝ御りをんしとかくりあわせも
　花 おとしてかれてこし
かくしみきりいくこれのおもむき色ありか
　細 手を物とかつといとしき人をとこく
ゆうきれんきりするとさせおかふ所ありて
くいうまゆかさくしよろしたくなくまとてい
　源詞
しまはらて給ふもそくとのそへうる
　河 俊之
りの使いとおしゆかりてまれ人をゆこきん
てうけやまびこのこゝろかのいとくさし
　たときよしくらりて深もしのこと
うまをかしらくしてたをもひきよせて
まひくかしのつま戸よいでてとさしあ
まれいかにきえ歳の火もさしよなかり風とこ

この院のあづかり
細 夜さりなどひかる人をこそ
こは院のあづかりの子也
八歳より[illegible]
[illegible]
上わらは 細 河海に
つるまは[illegible]女のりし[illegible]
[illegible]男童
よみて

さきらし 瀧口 瀧口は蔵人の被官也 どの世にも貫首
[illegible]
[illegible]
云なり
ゆみ 弦弓絃也

うちふきたるに人はすくなくてさふらふかぎりみなねたり。この院のあづかりの子むつましくつかひ給ふわかきをのこ又上わらは ひとり。例の随身ばかりぞありける。めせば御いらへしておきたれば紙燭さしてまいれ。随身もつるうちしてたえずこはづくれとおほせよ。人はなれたる所に心とけていぬるものか。惟光の朝臣のきたりつらんはと とはせ給へば さふらひつれど おほせごともなし。あかつきに御むかへにまいるべきよし申してなんまかで侍りぬときこゆ。このかう申すものは滝口なりければ 弓の弦いとつき／＼しくうちならして 火あやうしといふ／＼ あづかりがざうしの方にいぬなり。内をおぼしやりて 名對面はすぎぬらん 滝口のとのゐ申し いまこそと おしはかり給ふは まだいたうふけぬにこそは。かへり入てさぐり給へば 女君はさながらふして 右近はかたはらにうつぶしふしたり。こはなぞ。あなものぐるほしのものおぢや。あれたる所はきつねなどやうのものの人をおびやかさんとて けおそろしう思はするならん。まろあれば さやうのものには おどされじとて ひきおこし給ふ。

ひあやうしといふ／＼
細 文選五十六新漏刻銘曰 衛宏載傳呼之節 注 衛宏漢官儀曰夜漏起 宮中宮城門傳五伯官 符行衛士周廬擊木柝 傳呼備火 河 誰何火行 史記 本朝文粋云夜行鞘 夜之警火田府中呼曰火 危波誰何 源氏
うちをおぼしやりて
細 此所よりしに[illegible]
[illegible]
殿上の一刻に殿上侍の札を奏して其後侍臣の名ごいめん まいるを名ごいめんと名謁と云 殿上にてのなたいめんなり

さぶらひは名とよばれてなのりするハ此次に滝口のとのゐ申あり殿上の申と云も名謁とおなじ事
滝口ハ凡人あり抑いづれも亥の剋乃するれどいふくもあまねまでそいとくあり 孟日
細延喜近衛式凡行夜者内裏官人一人近衛一人 起亥一剋迄子四剋但右起丑一剋迄寅四剋 箋しのゐハ延喜元年より
のことなれハ此物がたりまでひゞとをまり
いとうそそこうりん地 太子の上しらくとあるさりのみやりしのかのみやたへと源氏の行きのひしれん
ちわりなれがらし給ふらく
[illegible] 細 夕顔をよう
師 て右近が御へと云
の地そろしう思ひめしむと
たり
年くらいとそ 夕顔の
よよおせうくりのかゞみ
まふどし源氏の乃まひてさ
ぐりあつく
源 九株をひきしをさく
源のほうりひきかせて
女房などへかそ滝口どめて

みだりこゝちのあしう侍ればうつぶしふして
侍るや御前にこそわりなくおぼさるら
めといへばそよなどかうはとてかいさぐりた
まふにいきもせずひきうごかし給へどな
よ／＼として我にもあらぬさまなればいと
いたくわかびたる人にて物にけどられぬ
るなめりとせんかたなき心地し給ふし
そくもてまいれり右近もうごくべきさま
にもあらねばちかき御几帳をひきよせて

にけりてもまうれ
細 滝口ハ源氏がめされてある
まことぐあり給ひて
まう運と帰らくし

じきしのぞうり 寛
平法皇京極の御息所と同
車して河原院にわたりて
くあり給源融公の霊さく
るとどまりて御息所を取入り
まふ帰に浄蔵貴所に加持して蘇
生し給ひしと河海に有
男なりしも 細 紙燭も此篇
あれども吾身の上をも左
まとてまひて此君のるを
ゆるぐ思ひもそるなり

なほもてまいれとのたまふ例ならぬことにて
御前ちかくもえまいらぬつゝましさになげ 長押
しにもえのぼらずなほもてこや所に 発語のことく 源氏の詞 孔子云
したがひてこそとてめしよせて見給へば もとの本にもそよそく ちかくとりよせて
たゞこのまくらがみに夢に見えつる 枕上に見えつる女の面影
かたちしたる女おもかげに見えてふときえうせ
ぬむかしの物がたりなどにこそかゝることは
きけといとめづらかにむくつけゝれどまづ
この人いかになりぬるぞとおぼす心さはぎに
身のうへもしられ給はずそひふしてやゝ 夕顔の上の事
とおどろかし給へどたゞひえにひえいりて
いきはとくたえはてにけりいはんかたなし

ゆふしあらし

江談ニ於河原院京極御息所半死ス
召浄蔵大法師ヲ令加持絶ワヅラヒ
蘇生ス云々其後車ニ抱乗セ
テ還御件戸面ニ有打物跡ニ
是河海と同時のことし
さのみはさのみの事ハおかわりもと
へそれども 法師にハかゝる
どもれバ使の時ニあり
く思ふまんづれども使の人
もなしと申くめる頃く
あらひりのこしこ

同 人のまるしるよ魂魄の二ツ
あり三魂ハ肉どまりる事
ぬるく天人のうちらく五陰離
散をしハよくどるれゆく
隔生のすゝめく七魄ハ屍
とやすらすなく其所彩抔
のこしる六塞平のりのよ
て小神通あり是を会相法
身と現ゝ十三年して本
有ま帰るゝ十二年まそ
ハからねよそひて旅くされ

さのもしくいかにといひふれ給ふべき人も
なし法師などをこそハかゝるかたのたのもしき
ものにはおぼすべけれど 句 さこそつよ
がり給へどわかき御心にていふかひなくなりぬる
をみ給ふにやるかたなくてつといだき
て 細 あが君いきいで給へいといみじきめな
みせ給そとのたまへどひえいりにたれば
けはひものうくなりゆく 細 右近はたゞあなむつかし
とおもひける心ちみなさめてなきまどふさま
いといみじ 南殿 紫宸殿也 南殿のおにのなにがしのおとゞ
をおびやかしけるためしをおぼしいでゝ心
つよくさりともいたづらになりはて給はじ 源注 よの

しきけしきとどろくり 抱ゆそうらくうつなり
南殿の鬼のなにがしの事
よ延喜朱雀院の御様こそハ何りの宣旨うけ給はりて世継云ふつ延の御時とハ光代の
よ南殿の御帳のうしろのかたを世継よりそひしに御殿のいつきとよくへゆりそれ
ばにありしにてさぶらふ世継る毛ハひとくとおびさるに日のいとの横ちたに盛くなりと
いとおそろしく思ひめしされどおくしてきこえむと会せさ給ふなにかやけの勅定
うけたまはりてまゐりぬる人はなにものぞなのりさふらへといはれたり御太刀をぬきて
めさせられけるとてさせまうされければかへしてうちはらはせたまひけりとぞ
きり
うちもも 南殿の鬼もやそくに有しかれハ源も夕の方へいつものとのこと

こゑハおどろおどろしあなかまといさめ給ひて
あなかまとハいさむる詞也光源氏の我もおそろしく思給ふ詞也
いとあわたゞしきにあきれたる心ちし給ふ 源注
この男をめしてこゝにいとあやしう物に
をそはれたる人のなやましげなるをたゞ今
惟光の朝臣のやどる所にまかりていそぎ参
るべきよしいへとおほせよ 細 惟光が兄也 なにがし阿闍梨
そこにものするほどならばこゝにくべきよし

いそぎまゐるべきよしとて仰せよ
惟光のこゝろへまゐれと云付
て人々 出せと滝口よの詞
也

けしきある鳥の　奇怪なる
いさゝかけしきあるを[illegible]
細 河海抄のおもむき[illegible]
[illegible]
[illegible]
白氏文集第一凶宅詩ニ
梟鳴松桂枝、狐蔵蘭菊叢
前主為将相、後主為公卿
云云　[illegible]

忍びていへ。かのあま君（細 大弐の乳母也）のきかんにおど
ろ〳〵しくいふな。かゝるありきゆるさぬ人なり
などものゝたまふやうなれど、むねふたがりて、この
人をむなしくしなしてんことの
いみじくおぼさるゝにそへて、おほかたのむく
〳〵しさたとへんかたなし。夜中もすぎにけん
かし。風のやゝあら〳〵しうふきたるは、まして
松のひゞき木ぶかくきこえて、けしきある鳥
のからごゑになきたるも、ふくろふはこれ
にやとおぼゆ。うちおもひめぐらすに、こなたかな
たけどほくうとましきに、人ごゑはせず
などてかくはかなきやどりはとりつるぞと

屏風のかみ　屏風の上也
[illegible]
[illegible]
[illegible]
細 [illegible]
[illegible]
[illegible]
物のあしおと
花 李部王記ニ延喜八年清涼殿霹靂之後貞崇法師候清涼殿之時聞大人足音是邪神所為也
ありか定めぬ　孟 風の上
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
奥入云 此哥近代哥歟不定

くやしさもやらんかたなし。右近はものもおぼえず
君につとそひたてまつりて、わなゝきしぬ
べし。又これもいかならんと、心そらにてとらへ
給へり。我ひとりさかしき人にて、おぼしやるかた
ぞなきや。火はほのかにまたゝきて、もやのきはに
たてたる屏風のかみ、こゝかしこのくま〳〵し
くおぼえ給ふに、物のあしおと、ひし〳〵とふみならし
つゝ、うしろよりよりくる心ちす。これみつとくまい
らなんとおぼす。ありかさだめぬものにて、こゝかしこ
たづねけるほどに、夜のあくるほどのひさしさは
千夜をすぐさん心ちし給ふ。

為證哥トあり
命をかけて　とやさはあれ
よう隠ゆゑに夕顔のやうく
なりまへは源も何となり
まらんとおもひあはぬは責
と何かる霜執まてなやう
に命をのこるうきめとこ
みかそとなく
おほけなくあるまじき
細 夜査にむかけなきる
の霊物をおもしきむくひ
をしかほとこし
忍のぶとも世にあらはるなく
れるなく
師中庸云君子戒慎乎其所不睹恐懼乎其所不聞莫見乎隠莫顯乎微故君子慎其獨也

して鳥の聲はるかにきこゆるに命をかけ
てなにの契りにかかるめを見るらんわか心
なからかかるすちにおほけなくあるまし
き心のむくいにかくきしかたゆくさきの　昔今のためしともなるへきとなり
ためしとなりぬへきことはあるなめり忍　細 内裏に聞えて
ふとも世にあることかくれなくて内裏にきこ　源氏の君の事也
しめさむをはしめて人の思ひい　天下にかくれなくてあらはるへき也
はんことよからぬわらはへのくちすさひ
になるへきなめりありありてをこかまし　イニナシ
き名をとるへきかなとおほしめくらす　夕顔ようさ中にあらぬてのまそ
からうして惟光の朝臣まゐれりよなかあかつ　細 今夜しも惟光遅
きといはす御心にしたかへる物の今夜しもさふらはて

たちまちにもあまり
細 始は惟光か吾独怨人
の分かしてありける
と思ふなるへし
これひとり
源ひとりさかしかりて
し給ふは右近のまへにも惟
されねは惟光の来てか
なしさもとおもひしか
二ツ共にみえむれひとりさか
し人にすれとあり
此人はいきとの人
花 杜子美 詩云驚定拭涕
河 悦字之
とこのことは
孟 撤の心伊勢物語にあ
まれてからにとみのこと
て此文ありと云

さふらはてめしにさへおこたりつるを憎
しと思すものからめしいれてのたまひ　夕顔の事也
いてんことのあへなきにふとものもいはれ
給はす右近大夫のけはひきくにはしめ　太夫
よりのことうちおもひいてられてなく
を君もえたへ給はてわれ独さかしかり　源も
いたきもち給へりけるに此人にいきをの
へたまひてそかなしきこともおほされけ
るとはかりいといたくえもととめすなき
給ふややためらひてここにいとあやし
きことのあるをあさましといふもおろか
になむあるかかるとみのことには誦経な　誦經
とをこそはすなれとてそのことともせ

きのふ山へ　惟光が詞なりあ
ざりの京より居たるよしを
申也

しほしみぬ
孟 世の事によくなれたる
人をいへり
くせし詞　細 惟光ハまだわかくて
力をつけ給ふやうもなし　源も
もまだ年もいかねばなれ

をられとて、そのことゝもせさせむ。願なと
もたてさせんとて、あざりものせよといひ
やりつるはとの給ふ。昨日山へまかりのほりに
けりまづいとめづらかなることにも侍るかな
かねて例ならず御心地ものせさせ給ふことや
侍りつらん。さることもなかりつとてなき給ふ
さまいとをかしげにらうたく、見たてまつる人
もいとかなしくて、おのれもよゝとなきぬ。
さいへど年うちねび、世の中のとあることゝ
しほじみぬる人こそ、ものゝをりふしはたの
もしかりけれ。いづれもいづれもわかきどち
にていはんかたもなけれど、この院もりなどにきかせ

この人独　此院守り独ハ
むつましけれとも一類のもの
いひもらしもすべし
とのこと

けんぞく
孟 眷属　或 眷属

山寺こそ
山寺にハ死骸をおくりを
くやうなることも自然と
あれハ人のめにもたゝ
ぬとなり

むことはいとびんなかるべし。この人ひとりこ
そむつましくもあらめ、おのづからものいひも
らしつべきけんぞくもたちまじりたらむ。ま
づ此院をいでおはしましねといふ。さ
て、これより人ずくなゝる所はいかでかあらん
とのたまふ。げにさぞおぼさるらん。かのふるさとは女
房なとのかなしびにたへずなきまどひ侍ら
んに、となりしげくとがむるさと人おほく
侍らんに、おのづからきこえ侍らんを、山寺
こそなをかやうのこと、おのづからゆきかひまぎ
るゝこと侍らめとおもひまはして、むかし見
たまへし女房のあまにて侍る

ミツワ
三輪 義狂波
ふるとぐくそし
孟 日本紀云水神罔象女
罔象此云美都波伊特諾
尊也神也髪白て老姫
拵へといへりとしられば
秋思ひても三川のみ
をぐひまで老よたるれ
一説年よりぬれば腰かゞ
まりせくぐまりて二の膝
とゝりおちかまゆりしら
まゝりて三の輪とみ
つれるがぬくゝるく一説
武細云表紙よのしとるく
ごとる 細うぐくしとき
師 今俗よいんごりとちらし
えらく
こゝいしつゐまとりてそて
惟光へ夕魚と蛙ほいつくハ延
あつ佐よ甚てそてをに遣
孟 弘仁八年八月従三位橘
朝臣常子薨以席裹屍
さしやり 孟 サザい 依て 細い
鄕 蓬仙居 おりくらいされんく

おんぐし山のへんよりみ川しもそてまゐらんとて
れ二所がらくの網代のめぬりしてよりとくべしねの。
三川よくそてもともゑゐりなり。わかゞりハ人ゐ
げをやうるゐれどいゝてかうとゝうよゐりとき
してなをふるて結城をされなば車しんぎの人
とえいでうさしまゐりじまれバはじまるつよ
としくてこそ惟光のをなかいてうじやうちゝく
うとまうげもおくらくしげなり。こゝとう
めしもえゑねバそくらかれいでつるもの
られずひてあさましうゆるしと妙ばをば
なりゆんさあとうしとかへどをやれ馬
くらかれとく みゝく二条の院へゆるしまゐれん人ゝはゞし

細 只車まえてひおかくゆか
かなしく 師 夕魚をとわき
もてそてまゐらせてうんとに
おりく
君よゐるいなりてゐれい
源の車ハ夕魚をとの世惟光
かゐるハ源よなりられて惟
光ハゐらみそれく
こうりひらきおあ
うりきねの袖ぐゐるや
兵将焚へのなそれくるりを
ひききあげてゐらみちのな
きらもさく
みそのりそいて
孟 日車みそくゆゐんのを
りしいまくりてうハう
こみんと源の心をとく

涙作しぬほどよそて夫ぐをとそへてのとれば
君よしまハなりて わき道へちらしりくらり
おきさあげるとして御さがわハいゝあや
ちくみわしぬとくりうれども気色のいとゞ
ゝ袂をなれバそそてもよぐさハ袖も定
あらぬでこれ めさ西ふくおりつきちりん
いづこよりかへしますゞゐるやおしけまこし
させあふれどもいへども惟のうちよりあひて
むねとそさへて去るまいといみじきれバこ
てのりそひてゆるきらりつてんいさらりさる
んとくさいゝあまりふちもんでもてくいきまこれ
よきりとつゝくやせんとらまずひの中

れてしもてく身もあ[illegible]
らん作して
頭痛熱氣みじん[illegible]の愁
傷のこゝろばかりのあはれ
もありけるや

このおもえおゞ[illegible]
帝源氏をとゞめさせ[illegible]
しるべし

めを[illegible]とよれむかひあ[illegible]らちえす
れぐしもいてく身をわづらひしていと
かしくまじられたへがたくてまれ
をはじ[illegible]よ[illegible]ぬるなりし[illegible]を申らく
かれどもさわがり給をねがへるやしがり
てれうゆるぞそのりし[illegible]ゆ給じ[illegible]く
てけしからぬ[illegible]給さまてよ[illegible]れつるひ
わりこのへもえ[illegible]を出をまふりしまり
おほつるすゞうせまふ[illegible]とる君[illegible]ち条
つまへどものちゝじやうくうりとさち
なうちこすくとつりさまんとのおもひてそ

細連枝の中に以中納言と右大弁
葵の上以方の病く
禁中より[illegible]の勅使

[illegible]のしらちすしのありわれりて[illegible]
細源氏之大弐のすとのまつく

けどの大臣のつうほひもり舞りくおゞつひ給
しかうらそり[illegible]けなまじしてぞ
れたりしゆやはこ[illegible]りきりしとこおつわ
みをとりてははくすんぬるまう今ひと
さびしうて[illegible]しらがいとき
すさまりか[illegible]ひしものいまへのさゞき
よつらしや思ひんとおもへてまうりしは
その家がけりろ下人のやまひしまろが織よ
えいづくわへでたくぬるまゐとゆらぐくかり
て日をとつらしてなんどりいぐ給ける然て
つけ給しらは御まなるけハいづるかぢん
なるつらくせのあへかしこまりてえきあつるぬ

その家がけりもろ下人
細川様気をつまゝりしよ
くのあるし
みらくかりて
源氏のわすふなりけれ
をとくりて日を書し
て至くもしらなく
御心得
称すかり
葵上のうせ給ふる事ハ
八月十六日の事也九月ハ秋月
まて一日より御弥るまし
廿五日の様よりれ給より
て参りつれまもへきるなく

しはぶきやみ　孟　嗽病(シハブキヤミ)
咳病同　咳嗽同
いとむらいにて　細　簾をへだてゝ無礼と
頭中将にきこえんとし給ふ也
さらば　師　是は中将
勅使にまいりての[illegible]源
の内へ[illegible]とのたまふ
其由は大臣へ[illegible]とて
まてござ[illegible]秘り
されしものゝなり
ゆきふれにかゝらせ給ふ
細　頭中将のきゝてかくいふ也
よのつねのやうにもさやうの[illegible]
つゝしむべき事なり

あり。此暁よりしはぶきやみにや侍らん、か
しらいといたくてくるしく侍れば、いとむらいにて
きこゆる事などのたまふ。中将、さらば
さるよしをこそ奏し侍らめ。夜べも御あそびに
かしこくもとめたてまつらせ給ひて、御気色あし
く侍りき、ときこえ給ひて、たちかへり、いかなる
ゆきふれにかゝらせ給ふぞや。のべやらせ給ふ
事こそ、まことゝも思ふ給へられね、といふに、むね
うちつぶれ給ひて、かくこまかにはあらで、たゞ
おぼえぬけがらひにふれたるよしを奏し給へ
いとこそたいだいしく侍れと、つれなくのたまへど
心のうちにはいふかひなくかなしき事をおぼすに

蔵人の弁
孟　くら人の弁頭中将の弟也
細　頭中将には大方の事を
かくしまふて弁して　秀
奏しまふなり
あすなん
細　長くこもりてもいかゞなれば
明日葬送をすべきよし

御心ちもなやましければ、人にめも
見あはせ給はず。蔵人の弁をめしよせて
まめやかにかゝるよしを奏せさせ給ふ。大殿などに
もかゝる事ありて、えまいらぬ御せうそこなど
きこえ給ふ。日くれて惟光まいれり。かゝる
けがらひありとのたまひて、まいる人々も
みなたちながらまかづれば、人しげからず。
めしよせて、いかにぞ、いまはと見はてつやと
のたまふまゝに、袖を御かほにおしあてゝなき
給ふ。これみつもなく〳〵、いまはかぎりにこそ
はものし給ふめれ。なが〳〵とこもり侍らんも
びんなきを、あすなん日よろしく侍れば

げにに若みても
孟 世の中乃うききびしく
に身をうすげにいふ谷こ
そしわくうりけるめ渚海
玄旨ぬ山の谷 拾遺集ニ
まあり彼んれゐし
拾遺無山谷ま煙のかし
うらばらわくへてし
秘とおもふらん
花 右近悪のあまりに谷
ゝ身をもなげんの心

見れもいとしんち
夕貞をおもひてなりもする
くれとりの人るみど惟光
ハとおもひて源をいくべ
らをおしとのあふく
さるべきにても
細 西ニしおもふすも空れ 并
みるのふくさへべきくと
たくさあやしと 師
九山消失あらんとも 皆前世

葬のすゝめも
とかくのこといひしたゝむる老僧のあひしらひて
細 老僧ハいふことと同
侍るよりひらうひつけ給めりと宮ゆへそひとくり
惟光詞 生之
つけ女もいうかとのまへハぞれるん又えいくまう
路く
うゆわ分これもどうれじとまじひ給そげる
右近も夕貞のうへ(を)いとゝもに死なんと也
谷 イニ
ハるめかてもゆらつりめぐへくなんとすまへはる
細 右近ハ彼女へもいふまじけれと也
のうるし人よつぎやらんと中をとおもはし
えてより思案してと也
おひ右川めよこしの海ゆまひめぐらしてとを
孟 夫人をとるらく
んぐら人とき侍りつるとうり宮ゆうまうく
源く 細 源く
よいとやうじとおぼしてこれもいとくらな
惟光詞 (ふ)けきく
やましくいうめべきよりとるん将ゆゑとのさ
惟光詞く身のうへに致ゐぐとく
まふすゆうろうよめゆりりのをそせ
うちべきよりそしうかの(め)しゆしめ
らせじと思ふとく
めしよせじと思ひ
わくらバ……
まろが川りのし侍などやまでさうし、さつるを
細 源詞之 細 完れり
るすとハ思ひ乃世たとく
れ母すひるきしうりひさうんのむさきかひま
源の心ろくしさんゆへとこ之荒 毛詩
夕貞の
人をいたづらになしつるかことといひおふべき
夕貞のゆかりまでもうれんとく
がいとからきなり少将の命婦などにもきかすな
廿ゆ壱(?) 細 惟光が妹く
尼君ましてかやうのことなどいさめらるゝを
大殿く
めいうくとおもひこしくなんおぼゆべきと
惟光詞之
くちがため給さらぬ法師ばらなどにもみな
孟
異本 あく(ね)様なる(も)
いひなすさまことに侍るとぞきこゆるにぞ
細 二条院ニ侍る女房之
かゝり給へるほの聞女房などあやしく
女房の心之
何事ならんけがらひのよしの給て内にも参
惟光と源とく
り給はずまたかくさゝめきなげき給ふと

七十二

細こゝろ
きくにてあく
くハ来りて雑ら居せよと
と孟　葬礼のみどれてゐ
よのまへどもの事ぐあぐ
さぞ我よ何せられと惟光
がしと　師細孟如此但一段
よ事ぐあらせとハ兎よこ
とゞまりくびひそろにあ
せとくあるよハのみど惟光
が御おど立を御使して愚
びゝぬてらびつくも知ぐらぬ
まゐらの候し
ある人みもしとふみハかれとし
細惟光ぐんともいふてと様
みりしのあらし
ひとまいくしあき
孟　退くあてしてあくまね
てうとハおもへども惟光ぐと
くやきなでちやくゆり
すせとしし

のぐおやしぐらさしくまこしろくくもれをとく
それほどのさ悔り状のまへどおすみかしくしく志
くもんへさふかを作りしいそくしく何がいと
かれしくゆかさかれだらしんあしとゞふへ名
まことにいまつすひよのるさこかしるとみさらん
かいといぶきかんきごとゞるふかくりのもんとの
あふどいとしふいくあきをしくいさへどさ何
されむもいらどもんでやゆそしおして衆ふ
けぬささよくろしとおかうしませとやとハ
ひぐろの所やつれよまうけあへるかり状御
さらずそくきくへおずらして出給ハそるつくさ
くらしいうしくらへがくりけ出つむぐくおりつ

あやうりりしゆうり
義に東流そそのるすく源
の御心でも称来るとなるす
とハ思ひとりあらく
まんのうらがと
とりべのに葬送の供奠
京きどもなべきよ平生れん
すりバ掛ひりしうるへき
を唯今の御んよハ何を
もひ給ひぬく

ちくさきらよおそらてまどおやうりりし物
ごりよいゆるもんとゆかりしまづつへどもかれ
おしさのやうくるすくらぐいまれりくらぬ
でハあらこ川の世まりおわりしりくそらを
もろんとゆかりし念じて御のさふ路ぶ
とぐして出給らもとくく十七日の
月さしおくるけるの侍ぐはさらめ乃中へも
侍のかろうよ鳥へ路のかさおもじさやりくさ
ろ稲をどもむかりしきくもおすみとも覚えし
給つぐそうとみぐろくらしおそゆるしつき
ぬおかりさへもそらさよいくさ露のかさてく
よぐくまくどとこるへろあまれてる乎ぬるぞ

その屋は八女ひとりなくこ
ゑのみしてとの方に別し
わづか二三人物語りして
其の方とは女のあつかひの
八女の家のことなし
一念すれば念仏
孟河華厳以前に六字念仏
得二十五功徳之由見聖教
清水の前なし
細 十七日の参詣の人乃様
也 河原亀十一年初建
立延暦廿四年官府界
四至以田村丸私宅寄
附之
一のあまたなる
細 惟光朝臣の乳母之前
ま書みあし女ゝの尼そ
作な東山のかにすみし
大徳 行功のつもりたるを云之
火とりそむけて 孟 源の
物よりとりて火とりの

哀なり。ごあかしのかげほのかにすきて見ゆ
その屋には女ひとりなくこゑのみしてとの
かたに法しばら二三人物がたりしつゝわざと
のこゑたてぬ念仏ぞする。寺々の初夜もみな
おこなひはてゝいとしめやかなり。清水の
かたぞひかりおほく見え人のけはひも
しげかりける。この尼君の子なる大とこ
のこゑたふとくて経うちよみたるに涙の
のこりなくおぼさる。いり給へれば火とりそむ
けて右近は屏風へだててふしたり。いかに
わびしからんと見給ふ。おそろしきけも
おぼえずいとらうたげなるさまして

それはいふくぬり
師ばらそれも源とされては
かやうの一所へおりさまおぼつかなく
もと源氏も夕顔ともされど
まだしらねども此の表を
思ひしは源氏しらぬ事よ
も法師ばらもすべてしらぬ也
ことさるまえまうしあると惟
光のはからひ也
いまはの御ひたき
夕顔をとかやうに思ふ
しなりて八人にそても
何ともうちきなく

まだいさゝかかはりたる所なし。手をとらへて
我にいまひとたびこゑをだにきかせ給へ。いか
なる昔の契にかありけん、しばしのほどに心
をつくしてあはれにおもほえしを、うちすてゝ
まどはし給ふがいみじき事と、こゑもおし
まずなき給ふことかぎりなし。大とこ
たちもたれとはしらぬにあやしとおもひて
みななみだおとしけり。右近をいざ二条へとの給
へど、年ごろおさなく侍りしよりかた時
たちはなれたてまつらずなれきこえつる
人に、にはかにわかれたてまつりていづこにか
かへり侍らん。いかになりぬ給ひにきとか
人にもいひ侍らん。お[illegible]

うれたきもの
孟 杜子美詩死別已呑聲
生別常惻々と作まりて生
死よりもまさ別ハ悲しき何く
とあるもうつゝも
然とされてもさまざまにて
もだ白のさるうくなれる
をかうよ跡よるあく
人もたにかくりさぜ命
ぞとく
くいふ秋男こそハ
細 をさく にたとまハ秋とれめ
との給へども又君男もあ
やうく堪がたきとく

あはれさにしもハさる袖ふるゝ人まいひさけかれ
侍らんかつらきさしもひろくみすきまかさひ
て煙よしらひてたてひまいりすんといふこ
細 原のたえだえとしつりとなくさめまつて
とさへありけれどさすかん世中ハあるわけなき
ものからすりしぬハあしとおもふもうつゝも
わかれし命のかぎりあるものまをすんあらむ思ひ
ぐさめてまれとはのめしとのきひらしら
へてもかくいふ秋男こそいひさとまりましく
孟 奴婢
さへらもそれとの給もこれのりけりなし
や惟光朝ハ明かくまたなり給ありたんなるや
原の名残おしく思ふ
くちしせまひかんと思ゆれバかくりこのとをを
られてしはねもつしめくかりてゆくあふ

いとくしき霧深に
細 常の霧も深く霧のき
よ露とさえあけまくれハ
袖もいとうわかれ江の
ゆすへもかくやハ人の
心吹と思ふ給ふべし
師とさくんまじひのわ
かまへ霧よ途方と
くすふらしまふく
うらそしきつかしがわ
ぬぞのされたる
細 原の秋のそとをせまひ
しか甚まくあるき海く
思もあらし
江こゝの秋こまそ 孟 波塘堤
花 防鴨河使とハ、つゝきと江り
知くも川河のつゝきと江り
人まあく
くらうらの雲まてそられ
ゆかき 孟 放埒いろく
よみうやうろらく
ふらてゆく行末もさけばくの
きそ心のそうしふてまるふづ
別ハさてつんとよきまふう

さらいと御けさまいとくしきさあさき霧ふまい
細 ...
づことるすくまくふらしまふありしおむ
まめのきよなるを
かくうらふしさらつさ海くちりてしま海
へらしがわかられなるのけぞのとうくれ
まりつゝたましいかわりもんらさきふうと
さらそでしゆ袖さる御馬よもたらかくし
くのうあふまじされさ海あれバみられと
川そひすけてかゝしまさすかまつてと
細 ...
の提や
の袖みく馬よりもくつありていうらしく
袖ひろんとたまふるべし
原の名残
れらちまじひとれバかくらの雲まて
細 二条院へうつさせ給ふ
そふれぬべきさみやあらんさらにえいき
つくまじれくらたまへんもるとのあまよられ

まじへるはいかくならぬともかたく
りがたくなりしかしくは
細 君を見けりてあしくはしけれか
とも 錄サツすそしくしんべきか
とし推定が後悔せ
このおかしきも 昔よいま
一度〻のさきつくとみえき
んがいふをうべきとなる
みうくりのせんとのあひし
をうつして後よのまふ
らもとしらく
川のなかれそてをとあらひて
盂優婆塞戒經ニ中流洗フ
手ト云文あり
いそしくうどり ありきた
まかうん 細 川かますく
けんかまつりしくあり
これはかりまいかる

う川もうらまさしひらくわざうらくさ
のまへうちうらたよあそび
みゝしせよはびとしあそくうくれは川の
終おほくまてとありひて清水の鏡なと録
んしまりても々すくせひまきみも
たあそれらくらをおもらししんのうちよ徘
と念じおそゑくさますまちれまでありん
二条院へかけり給ひかあやしう夜ふかき比
すり給紙へとこうるしきわさかれに付て
御よりもさ川んなきこれ悪びおりさ乃
うちたきおなりあも晩日のれ人てきみい
おもやまりうさまれしゆへいそくら

このらしやしらく
すこしまよへしあかうまりに
評 二条院の人くるまらさま
うちさちくまうらおとく今
一夜義理ずりまでいらのみす
ざくひまふすいみし猶見
ひまへはあらくひよされ之
ことまさきくうんよの山ま
つくひあうくしらぎふえ
まさへまうぶくひあすと
世よゐくひたうく
細川のうくひうきと今う
かうよいからて世よ不
相應なる故いうじとんで
の見く
雅定んうを　細川の事
はなしあしきかるが何と
おなへどき去をどありつゝ見
とするせ川の沙汰
あうなり

アとありきまかくんとちげくさあつり
あふしまめうかしにいそいそくうつりぐり
あそ二三日よ如めうよのびけあまやう
よしあふ内みとききうしめるすげくうと
なきうるまし礼いのりくさくよひますの
あうまつりもくへす修法などいのりてる
くもあくるそ世よあずくひますくゆきさき御
祈禱すれば世よるるうくめりしけすまうてあや
とあめれあてこの人乃さつぎあり らうし給
ぐらみもの方近と落ちせくあかくら
くありてきつくしを給これう川らら
かとさまずんどめりひのどめてこれ人のあ

ぞかしとおぼすさへ
細 服衣のうす墨さき(に)従ふ
かぎりあればうすゞみ衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける
みそらにも(?)行て 色を見るべし
細 うす墨衣の色を浅しといへり
河海抄 清少納言枕草子にいはく
ねんずし給へるさま いとゞなまめかしさまさりて
服衣黒 かくて いとゞなまめかしさまさりて
経しのびやかによみ給ひつゝ
法界三昧普賢大士とうちのたまへる
おこなひなれたる法師よりはけなり
わか君を見たてまつり給ふにも
なにゝしのぶのと いとゞつゆけゝれど
かゝるかたみさへなからましかばとおぼしなぐさむ
細 源の君の心也

細 服の事 主君の服をきる事
一説 服衣を主君の服ときる
延喜の御門 中書王も此服の事とあり 一縁 青ハおはしまさぬ

あひぐしてはかなきさまに ものゝあはれなること
とばかりうちながめて
しらぬ人だにあはれにおもひやらるゝ
ほどの事をおもひつゞけ給ふに
まことにいとゞおもひなげき給ふらん
なまめかしきは いふもさらなり
くはしくしてめでたき人にはあらねど
のちのよにもとおもひきこえさせ給ひける
くらべ給ふにも まさるべくもあらず
ことなるさまにものし給ひし
御なごりも いとゞあはれなれ

ふかひもなくて
ねぶり(?)入たるやうにて 夕顔の上なる
まろ(?)かたはらいたく候ふなめりと
しらぬ世
あやしきまで心ぐるしく思ひ給へらる
ことゞもありし
詩の作り
細 夕顔の事を思ひ出す
あはれなるさまにて 夕顔の死
明星上の
経也

今は八月十六日より経
ハおく八九月十六日八七日の
比なるべし
内裏のとのゐ所 孟 内裏
殿仕の大臣わが日車也 細 葵上
の御方にとくめ玉ふ事也

[illegible]源氏ハ
夕顔のかりそめを思ひて源ハ
あなたこなたをとて物する人の
物のけのわざなるべしといふ
そらしハ物のけにおそはれし
ゆへわづらはしきの事を云
御法あり
それいまだあやしきかたぞ
その人し 孟 あやしき

おぼつかながらせ給ふ御心わりなくて内の
御とのゐ所にまいり給ひなどす大殿わが御車
にてむかへ奉り給ひて御物いみなに
やとむつかしうつゝしませ奉り給ふわれ
にもあらずあらぬ世によみがへりたるやうに
しばしはおぼえ給ふ九月廿日の程にぞ
おこたりはて給ひていといたくおもやせ
給へれど中々いみじくなまめかしくて
ながめがちにねをのみなき給ふ
見奉りとがむる人も
ありて御物のけなめりなどいふもあり。
右近をめし出てのどやかなる夕暮に物語
などし給ひて猶いとなんあやしきなどてその

人としられじとはかくい給へりしぞまことにあ
まの子なりともさばかりに思ふをしらでへだて
給ひしかばなんつらかりしとの給へばなどて
か深くかくしきこえ給ふ事は侍らん
いつの程にてかは何ならぬ御名のりを聞え
給はんはじめよりあやしうおぼえぬさま
なりし御事なればうつゝともおぼえず
なんあるとの給ひて御名かくしもさば
かりにこそはと聞え給ひながらなほざりに
こそまぎらはし給ふらめとなんうき事に思したり
しと聞ゆればあいなかりける心くらべ
どもかな我はしかへだつる心もなかりき

八月に[illegible]かくし
まかりそめしたるよし[illegible]
御とのゐの事を[illegible]
孟 [illegible]
とえしらぬ[illegible]師
[illegible]の[illegible]
[illegible]人如[illegible]
いつの程より
[illegible]の俗性をしらで[illegible]
[illegible]
[illegible]わやしう
夕顔の名を源氏に
[illegible] 細 源の通
[illegible]
[illegible] 孟 夕顔の如
[illegible]
[illegible]
[illegible] 細 源も名
[illegible]
[illegible]
[illegible] 師 [illegible]

[illegible]

夕㒵

[illegible] 源も夕㒵も又源とうこうくも [illegible]

参 蒲心にハ [illegible]

[illegible]

[illegible] 七日くの

仏事経文多宝之 地蔵菩薩

因縁経 十輪ホにとるまと

[illegible] 師 これ十三仏と七々

日此ろまかりて七者此

ある供養をうるへく 最初

七日より盡七月 三四十九月

の乃忌日此仏像と図して

[illegible]

[illegible] 七ぎん此名を

[illegible] 八熱向して [illegible]

[illegible]

[illegible] 師説 夕㒵と

[illegible] 位の

[illegible]

[illegible] 細 [illegible] 夕㒵 [illegible] 三位 [illegible]

[illegible]

位之

らぬと示れしうろ甚上よ
命さへ人みつからの(?)けしと
三ましせこらり
つまひのふ二三年めよおもろく 頭中将之事
の君誕生三年めよみの中将
まし年絶四年めよ源のきよ
ひ給く則し年のるくむろ
らの君四ツるく流罪之下
ありし八年次のとしのるく
の秋の比 細 薦次之秋
もとまよ又の年の暮中へ
あれらでさうりるよく
孟 夕顔之腰痛き 本歌よ
てはとまるとそまかなり
と(?)おもろしきよそこまて
うつる山里
の京の乳母住所山里
てらで(?)ぞうりし 放山里へ
ひとぞく 孟 乳母(?)の所の
所りて山里に移とろき
に哀なる

命さへたへ給はずなりにしのちはかなき物のたよりにて
頭中将なむまだ少将に物し給ひし時見そめ奉
らせ給ひて三年ばかりは心ざしあるさまに
かよひ給ひしをこぞの秋比かの右の大殿より
いとおそろしき事の聞えまうで来しに
物おぢをわりなくし給ひし御心に
せんかたなくおぼしおぢて西の京に御めのと
すみ侍る所になんはひかくれ給へりしそれもいと
見ぐるしきにすみわび給ひて山里にうつろひ
なんとおぼしたりしをことしよりはふたがり
ける方に侍りければたがふとてあやしき所

(夕顔とく / 頭中将の子方四君の事 / 細 揚名介の妻なり / 細 方違のゆゑ / 此又条方へ出給ふ / 源よこゝろ得られたり)

これそへのと
うへつれみくもまて
思そとつひしんく
それそうて 閑(?)とそ含
やとらひまひしれまに以よ
とらひまて

の中将ねかも 細 以中将よ
も語りうつらうても
此勘(?)うろ横を勘(?)し
しそ語りのうろいくいう面
源の君よみりと見ゆく

に物し給ひしを見あらはされ奉りぬる事と
おぼしなげくめりし世の人に似ずも
のづつみをし給ひて人に物思ふ気色
を見えんをはづかしき物にし給ひてつれ
なくのみもてなして御覧ぜられ奉り
給ふめりしかと語り出るにさればよとおぼ
しあはするにもいよ〳〵哀まさりぬ
をさなき人まどはしたりと中将のうれへ
しはさる人やと問給ふしかをとゝしの
春ぞ物し給へりし女にていとらうたげに
なんと語るさていづこにぞ人にさとは
しらせで我にえさせよあとはかなく
いみじと思ふ御かたみにいとうれしかるべく
なんとの給ふかの中将

(夕顔の / 源氏も夕顔の / 細 以中将の子の事を / 細 / 帚木に撫子の事あり / 太を狗の 六方へ / 紙 / 源のいひをまもの / 合語く / 同語く / かの物よまてうくなりしれん / 夕顔の)

つかうひまさうかうし
以中将よきこし世ハ宮くはなし
おもひし夕顔の子をとひ
とられくるしさこと
ころくしくあはれなる人
なし　夕顔の方そへハ
これもおもしろきとそへる
る人なしとて西京にそ
やしなふよし
ひとりおもふ
ちいのありし二条院の事

かのありし院にこの
細前ありし源の君の…
此時中人のこの源を見給ひ
枕とりかはしさうらへ
いへばと　鴿　和名大伊倍八止本草云頸短灰色也
みゆくし院にて此鳥の鳴
しと
細ありし院とハ河原院
此河原院にハ鏡田居す
鴿の鳴

にもつたふべけれど、いふかひなきかごとおひ
なん。とざまかうざまにつけてはぐゝまん
にとがあるまじきを、そのあらんめのとな
どにもことざまにいひなしてものせよ
かしなどかたらひ給ふ。さらばいとうれしく
なん侍るべき。かの西の京にておひ出給
はんは心ぐるしくなん。はかばかしくあ
つかふ人なしとて、かしこになど聞ゆ。
夕暮のしづかなるに、空のけしきいと
あはれに、御前の前栽かれがれに、虫のね
もなきかれて、紅葉のやうやういろづく
ほど、絵にかきたるやうにおもしろき
を見わたして、心よりほかにをかしき
まじらひかなと、かの夕顔のやどりを
思ひ出るもはづかし。竹の中に家鳩
といふ鳥のふつゝかになくをきゝ給ひて、
かのありし院にこの鳥のなきしを
いとおそろしと思ひたりしさまの
おもかげにらうたくおぼしいでら
るれば、年はいくつにかものし
給ひし。あやしく世の人ににず、あえか
に見え給ひしも、かくながかるまじく
てなりけりとの給ふ。十九にやなり
給ひけん。右近はなくなりにける御めのと
の捨をきて侍りければ、三位の
君のらうたがり給ひて、かの御あたり
さらずおほしたて給ひしを思ひ給へ
出れば、いかでか世に

まてしらくはうらみていく
わざおりうしらくらう
すゝめんひよ女をこゝろや
もちろんしてん人はあざむ
よしよしめつましきん人の
あるとかつんちん哀わくわかんの
かはしてうんよあかりしく

ばかりとおもひまよひもくる
わざられもてなくぞしのうちく
ひやうるかいしつつまかなかなし
しん人のこゝろと雲とするしれ
をひろきれしおもひしら
しつつんとおもひもそかりみく
しらべとおもふもむかしのおもかげ
うかしろうしきわしみの音をきく
ありしそのまさよなかのさ夜しく
てかしまへりのはよれ家のこ

細川の景氣哀を催し
細此二条流ハ夕良の

別るゝやうにて夕の源氏と思ひしまでにうつしきあるさ

みうしなひしうらめしきあるさ

そも今は無しくおもひて

またしたまかき夜とうちもそして

こゝろもとなく　八月九月正長夜千聲万聲無止時　白氏文集

かやうの事　細　又御心を移して空蝉の事を手かゝせり　物語の書き法なるべし

源氏のゆくへの心苦しきあるこの事ありし中に

細　今は空蝉を忘れがたきもあるべし

さりあれど

ても志なねばうしとおもへる

どのしかしとやみよしもいひなしける

さりてもなかるらう　細　空蝉の心也　師　源の空蝉強面とし

ぞらるんとやうとうちすぐるよからく

紫しもとれめうらしころよのり

そりるやうとしるよりてりえて

まうねどもおもうとやうで猶かろしいかゞ

細　侍子のちる乃果してたゞ源のまゝれやし

空蝉

あはれとおぼしよりけるも

わすれもまれ給へずかきたるひかりこそ

まづはまことなり

空蝉の世はうきものとしりにしを又ことの

はにかゝる命よはかなくもかくしても

わすくもおもはれ侍るをいとかくおもへるも

くちをしき程のものともおもひしらぬは

こゝろにもあらずもひとりけり

みゆれはそこしはなしけちらくさは

やうやうおもひなりてしるくおもへるく

なりてやみなんと思ひけるも

つれなき人のかねてをかんかなしとおもへて

あやしやいかにおもへらんとをか
ねのかみらうしも
細 尼人かね自称なりける人を
といふ也 師 かねのかみ
うちいでても たれとも又わ
紫の萩のむしろ(?)寝しか
まゐ御文をつかはしけるに 孟 源よ
りおのおのかへりて
あま文をつかはさるゝ人ねおもふ
ものよりかへしさるゝをとる
くるとてゝ 花 源の今此ひ
かへてゝみゝくりをかやうに
つれなうれどせ(?)しは真
あり 師 此段と此段よりもこ
恒のうへもおもふの萩
細 ならしは其まてはなとて
かへし一夜の契もまくはか
やうにはかなしともかしさを
それとくゝつけなし
うらやうなる萩に 箋 合
のおもはれ 孟 後撰集
をとこしくありてのつね
故大納言うちそへれける

あはおやしやいかにおもへらんとかねのかみ
ほかにもいとゆゆしうすさみの人乃音 なまめき
ゆかしきれはおまへにてまつりゆる
もちしまへつかやとひつきなす
除きく孟 思へる又音の様く
恒のうへも紫の萩とひとしきす(?)か
何よろしていえ人くしのかく
さしはへすめかけましるをかうは
つけて思ひくしのこまへれとあやまりて
細 源のねきに(?)とうらか様く
かねもうかてたれかうけしとやひわくせ
はかりと(?)もへ(?)を持なしてんとおほけなとかり
いやましくきまさま(?)
ひかあいるうちかね(?)のかくさぬりのまひれ
思そくし小君ほの(?)えひしなく
紫衛 師 一夜のあはれ(?)
かれしとおんたゝおかしとかをまゐらせ
してんりはさてりとくしゆなくとくれ

源の何よいふ君は思て紫謂萩へとはしくのかみへまかり
源の心中よこえひとかうにかねも此様とうちくかうても源乃
かねのまへまゐりていひ出しにはすりしとかやうに源はなの心なかくく
ことにこのてとゆへてうかねのまへまかりてにみかけそとなみうちて心そ
かねのまへまゐりてもかしとをえと 細 かねのまへまゐりて心のうへ
心うしといへともくかうの御方伝へならしといへともいと師しもろまた
このゆふかてあくまもきれうみて
源のまへまゐりとを只今もあさりて(て)かの心く
おうかなくしくしかなし 孟 をとこもなくちくれへ小君まへ 箋 うと
とへるにつけておくりしかのかみへへかうとりほにあかうかまつり
ハ思ひとはつけくとたうり事の思ひしてぬとはいかなるこほあなかはつ
思ひてとゝのまへと
たりあやまりて
あそびにてとゝみるにもの人乃せんやうにハをこと
かねのまへまゐりて
心うしとおもへとハ
ならしとく
ちくかりしあくまもされうみて
恒のめくれ 只今とかれまし
らせそくらのひんも又わおもひも
我ハいかてまた(?)われかうえ
謂被く 細 なくはいとあるを源
とかねとのまへとおもひをかう
今と云頃ありいかにこて疑の
しのまうりて西まへまかり
とさる又一流 孟 萩が
あしうくまかりて
てはおしまふるとまぎらはさ
是ゆへとて 細 此人ハ高世様よ

紫の
恒のめくれ風につけくもまいて一かきこのかみのかは
し
も霜にむかひ わつてはかしけるゝ 源のかみまかりかへ
らうしたれけりて心くるさ海まゐらし 恒う
暮らし秋のまへ 京源と紫
げなるしかれかりしかかうかうしけて心の人
謂のむかしすへ
かうる人はえくしくてる川 まかしきさ海を
まいかしかれたるのかみむせありけ 紫謂萩のまへくまて

てさのこ義人ともろへさうやことくくちうくうり 師 悪筆の汐くろみて紛わしきと云義く
あらし八予おしき賤しき緻く 師説 紛揺萩子てて悪されば向ひさう教ハ味うくしとく 箋 此段義人おれの
えうしらしハひまらき
公事を源家ニ務之ろく盛説ろ
うりをまよ文も 今夕
翰よ細ごうしまへど紛揺
をも紀されあそねて又
もおくるいさうあめべしと
之 箋 此則おりよにくうれ
とおひて川多喜教之
孟河ニ汐りて毎よ又しなき
名ハ立ぬべし人ゆくくう
ぬ世ふしもあまりんでも
四十九日 細 いろくふそしも訓
まよしうへし 花 十月廿五日
の経四十九日におくろへし
法花堂 河云在北観院西
細 李部王記云天慶六正六
夜寛子卒。廿三十七日於叡
山東法華堂修諷誦云云
孟 小野篁目録云此男閑
つさまうてなく其浅深を祝の
水おして法花経を云てひ

さしどきさ母うさうしうまと 箋 悪筆はいろくとさうづけだとおもしろく せりしおろよ。
けくうらんおず猿ごうりすまよ文もあるさ名いさ
ちめべきれんのもちさひるみかり。その人ハ四十 箋 文章へ立ちて夕顔のうへをうたへるなり
九日過びてひえの法花堂みつくらせぞ。 比叡
きうぞくしりそじめてさるべきものとくを 布施乃料之
こまりまず経おもとをさせあみ。経宝のうぐり 布施の金銀あるとをつけてさきく
まくとさうるすしれ。雅光があまの河図紫
いとさうとれ人みくまるくしてろりれ 孟 源の師範の儒者也
みその師まそむろまりしくゆかしとわんざうはり
とめして。祭文つくらせのふ。その人とするて。

とひろ緻くらくあへし一段 おハ源家の故事くしうれき説。今ハ源と家氏の名
りんざうしそうせ 師 文章博士ハ文章をはうきうるやと。翰林学士これへ 箋 文章ー生れ学業を極
て後博士に任せうる之
祭文はいらせのふ ちろせめてとむを切て。むへし 箋 源の自作の祭文と文章博士よろせ
めくらすうしく義之 細花 祭文しし 重明親王家室四十九日願文後江相公朝綱作 見文粹 河 青和天皇貞観九年十月自製
賊 釈尊赤兎栴檀之烟 楽尽悲来天人猶逢五衰 見文粋
願文しし 云云 祭文自作例是也
細 御ちから借く
哀とおひし人のなるるさき海よたすりけにさう
あふこれは仏よゆづりしてまつろ
箋 諸宗の成仏ハ自心用発
の義こハ弥陀一仏超世の悲願
ハ他力本願なれハ彼摂取
不捨によませそゆづると
いろ義 甚深なり
我おさされよゆづりそてまろうりしおされ
げようきおーさまへれべくうとくるあろくりつ 孟 師範初くまいアに不及とく
きとと仰くさざめりとやさてさのびのまへどれ 源のく
あるさゞきもこ頂まてく。ゆうしくわかしきれ。
細 文章博士の心之
なみか人あそるんぞのハくとハ心ゆかしもなくて。
うらぬかしなげきをとしらりなうりきんぼく 従之
るう揺しなけ年かるるぞん
孟 源よむひをうるアうせ
の当座なるき人とく
きのさうさよといひかり。志のびてとめるうせ 源氏のく 調也

すゞし。もゆふハわがゆふ
細 誌。〳〵下紐にむすぶとよめる
あふ後の再會約しこと
をとこいひそめしわたらひハ
いつの世よりとくべきその
祢云とけてとハ解脱の義なる
義々 八証修の功徳を以て定
の所 云。解脱の門に入つきと
の経まてい　細 四十九日云六
中有にたゞよふらく　義 四十九
日のうちハ中有にたゞよふ義也
然れハそこ識の生処六道輪廻
いかにも定まらん仍造仏造経
等の善根を修して善果を
祈らしめんとく中陰経の説に
又云天台宗の心ハ極悪極善の
者ハ中有を経ずして直に
生れね定る中有をまつて法相
一宗の義ハ善人悪人の差別に
まつらく皆必中有の位をへて
生を贈るべきせらと

させ給へりける。さうぞくのはかまとり
よせさせて
なく〳〵もけふハ我ゆふ下紐をいづれの
世にかとけてみるべき。此程まではたゞよふなる
をいづれの道にさだまりてをもむくらんと
おもほしやりつゝ念誦をいとあはれにし給ふ。
頭中将を見給ふにもあいなくむねさはぎて
かのなでしこのおひたつありさまきかせまほし
けれどかごとにおぢてうちいで給はず。かの
夕顔のやどりにはいづかたにと思ひまどへど。
そのまゝにえたづねきこえず。右近だに
おとづれねばあやしと思ひなげきあへり。

うすさみしこし　孟 抄ほ
ごしハ如なり　何 惟光もかこ
ちらるゝよしなり
私のあさましきもの
ねさ海とうちなし
りんの氏の子ども
細 自然受領の子どもなど
恩どもりて中将よをぢ
てゆりて率て下り
たりけると思く　細
此家あるじそ　揚名介
妻ハ嫡女之又一人ハのかうし
御かうし乃妻に定めり　服日
右近ハかしこ人なれハ
細 君にまいらせ　右近ハ
別乃めのとれよく
なひつぶして
夕顔の今はめのとるど
よりハ隔心ありて右近
ねうしなひ
右近をかこちうしく
はゞかるを云ようばらぐにて
人路にこ閉居まうく

たしかならねどけはひをさばかりにやとさゝめきしかばこれみつ
をかこちけれど。いとかけはなれ
けしきなくいひなしてなを
おなじごとすきありきければいとゞゆめの
こゝちしてもしずりやうの子どものすき〳〵
しきが。頭の君におぢきこえて。やがて
ゐてくだりにけるにやとぞ思ひやりける。この
家あるじぞにしの京のめのとのむすめなりける。三人
その子はありて右近はこと人なりければ
思ひへだててありさまをきかせぬなりけりと
なきこひけり。右近はたかしがましく
いひさはがんを思ひて。君もいまさらにもらさじと
しのび給へば。わか君のうへをだにえきかず

ゆふがほの人へとぶらふよ
大系ハ夕顔の上の四十九日をとぶらふ
ひとしそとしとぶらひぬ中古
迄もむかしの事をえらぶ
ぬくゝ女子をとも有云とふ
ハ其事なりさく
あさましく御涙多くて
なり　師く　太生を方法
御法ハいくとせもしのびて
又むかしの御事もあるね
なりや云々

ゆめをだに見ばやとおぼしわたる
に此法事し給ひて又の夜
陰のかたになにみし化生
みしのゆめにうつれし院ほ
まゝ夕ぞうくまてりぬ人をえ
女房のかゝらんにとて
おかしきさまなる櫛と扇
へ女のかためなる旅にたむけて
又うちうちにもわざとし
ねむけ
孟　響礼
醜褐　日　餞別の道祖へ

まめうじし御とぶらひの人々へハ、わうぞこれらへを
ぶるえきうん、わさましくゆく忍ひくこ
過行（すぎゆく）。君ハゆめをだにみばやとおぼしわたる
に、この法事し給ひて、又の夜ほのかに
かのありし院ながら、そひたりし女の
さまもおなじやうにて見えければ、あれたり
し所にすみけむものの、われにみいれ
けんたよりにかくなりぬることとおぼし
いづるにもゆゝしくなん。いよのすけ神無月
のついたちごろにくだる。女房のくだらんに
とて、たむけ心ことにせさせ給ふ。
又うちうちにもわざとし給ひて、こまやかにおかしき

くし扇　御櫛の扇は
あふぎとやうくつるハいづれも
祝（いはひ）のことくしきなく　細　河海抄
家つくしハ　下向のしるし餞よ
中宮よりも扇をつかはしての
しさハ御身の祝にまうけられ
そのゝ扇の風をまもれる
孟曰
めき　細　黄帝四十余人子あり
最末子好旅行死于路誓
曰吾為神守旅客云々　道
祖神是也　孟　後漢書中
そハ道祖神に手向る奴
まさに旅人の道に古来
あらかし、何ぬさハ幣也
逢までのかたみばかり
蝉のはもたちかへてけるとこそ衣
までの形見にこそうつも衣
の袖はくちにけるかな
ら　なかりけるかなしく　孟　真鳳
集に女の衣をとりてさそく
かへしてしたもとのぞぬの名
ことをこそとゞめけれ　源氏ニ
ふかくかなりなり

しき扇おほくして、ぬさなどわざとがましくして、ぬき
なとわざとがましくて、かのこうちきも
つかはす
源　逢までのかたみばかりと見しほどに
ひたすら袖のくちにけるかな
こまかなることどもあれど、うるさければかゝず。御つ
かひかへりにけれど、小君して、こうちき
の御かへりばかりハきこえさせたり
空蝉　蝉のはもたちかへてける夏衣
かへすを見てもねハなかれけり。おもへど、あやしう人
にゝぬ心づよさにても、ふりはなれ
ぬるかなとおもひつゞけ給ふ。けふぞ冬たつ日なり

こまうるゝすそ　細　前にも此詞のうらくしられと例のかゝしつゝあり此等は清試
らのうきけりとみゆ　師　或説保之が宗徐の事をとりあつめて
徐のうちも云　細　もあけは夜の哀也今は空の哀なり　義　哀と
わかうる人のもよさるれそへつとも　師　不思議は世の人の
あやしうんにぬ　義　源のんに宮保が身を思つ　細　言也は河海
んつうく源ようちうれ　義　九月の末なるべし
字は　細　言也は河海
いふくこれ清てしせんきた　孟　清濁を仮く

間かけりもきりもしぐれて空の
気色もいと哀なりけりあひて
色かはりもとふかはりてもふゝよはきを
しぬ秋の萱原かれ〳〵に人もなくさひしけれ
かうしうれども物がしきおりめつらしき
やすのくさくもさへあるかなつり
くるへものび給しもいとおしらて
うしとも見えしらかとおもしもみたりら

色かはりもとふかはりても
細　前にハ夕負とハいひて九月の事なる
と秋の葉などゝふる物語
細なるの事のゆゑの
なるらんもうれしかるべき
ハ書と秋との事は哀也
この事は新古今集にも
其秋の中には哀の事に
かれらは　義　代事九月書の
事とも細に九月の
の事の節日とそうて
秋のもうけとしてうをまづ
とく　師　説　哀説
べし此ことは細にも宮

みしは前宮女の集にも
よるべてうれのうき思あり
古事とうりていますみさ
いせ物語にもあり
かうのうきの

ゐかけ〳〵ものまいもん人こゑへりしくはなきてかのれ
めづらかなるとはしるりかしめにくらりなる
そへりのしゆかれハやすりかりのい
ひさうしきつゝきりなどこゝろすり

孟　此一段ハ物語の詞ぞ　師　源氏のねざめなるはあまく宗徐夕負と
いふこと　義　は源氏一部のねさの事とさえてしらへてのいへり
ひきうひまひもしもいでなりくて　細　夕負の上には宗徐の
ひさうしみにいみもしもいつ　師　やそのうれは給もあかうにあかり
そしいしいも
とへ　義　給めなにとりとはなりのうき哀

おもふにこゝろもさこそ世のうつゝもかくてうつひらやるなり
おのらへかへりさえしてくえる首尾なるべし
ろうみがたくのたのみたのもんぐしるは　細　源氏ハ桐壺の帝の御子ながら
てたかたよと私わるそしてをも作るべし又実録の中によりくらされぞ
しとく　義　始めを注するよ周樽をとくんて要さうくだてへの
或実録にかくわれり私わかなるよりて　そしつておりぬて給をの
師　みつくの卯にみざるとくそうもん周総しくうさかめしき事はいそくにあ
かうにのこわるそとと　うめてごれを注くつさかすかんとやろう
あれぞそこ給まかくくとく　しさ事なるうくとえ

めかろゝのゝひさかさつみさんくとくとすく　盃 出ゝよしもおゐ白つゝん女郎花の
もののひさかふくる より 作 かさかるかゝるおゝひさかゝるくゝきつゝねてうつさかりのかれん
とゝろきしと作ゝのこころく是も帯条さきようへろんでりとさんかううけさんのひ人の
ねゝひさかるみさよしとゝし侶るお趣きろく 細いうき風山一隅ハ幕ー本の數端を結ひて諾
ゝうてゝ ん ゝみうりコうゐて見みれもた草原ゆうりゝんを